4-206
No 115/25.

松翁小品

東京帝國圖書館藏

有棟梁之氣矣

表彰孫贊王德

幼學之師

成齋孫公

緒言

一本編載する所先賢幼時の事に係る夫れ人の幼時に於るや才愚となく貴賤となく意向の因る所殆と其旨趣を同うす故に甲唱乙和其れ相感觀興起するや亦切なり是れ此編の著ある所以なり

一本編初め通俗の文体に一定せんことを務めたれど和漢の文及び譯文本と各自特種の氣格あり且つ摸寫眞に迫り動かしがたきものあり而して強ひて一様ならしめんとせば則ち却て語氣を失ひ隨て事情に遠ざかるの憂無しとせず抑本編意事を取るにあるを以て爰に原文の面目を保し造語の稍難きものは訓釋を付しぬ或も聊か漢語を俗解するの一端にもならむかと云爾

一本編分て十一部と爲し以て閲覽に便ふす而して彼此相通ト專ら此の部ふ屬せざるものあり看者其意に隨て之れを撰て可なり

明治二十四年十一月下浣　編者誌

目次

第一　立志　第二　孝悌
第三　剛毅　第四　頴異上
第五　頴異下　第六　雋秀
第七　心術　第八　學問
第九　詩賦上　第十　詩賦下
第十一　技藝　附錄

東京帝國大學圖書館藏

先賢幼時言行錄

犬塚敏三郎編

西哲の言に云く一志萬事を爲す而して清の湯斌其子を誡る言に云く我れ汝が早く貴からん事を望むにあらず少き時唯當さに苦しむべし苦しめば則ち志定ると則ち志を講せんと欲す必ず先づ苦を講せざるべからず故に之れに繫くるに古賢の數語を以てす云く艱難は人に人たる所以を與ふるの恩惠あり(勤苦は貴重なる物を買ふ金錢なり)人生れて艱難に遭際せざるは一大不幸あり(艱難汝を玉にす)艱難の何物たるを解せざるは心思に不具の人といふべし(德慧術智ある者は必ず疾疾に存す)

總て著見する功績は光陰と勞苦との結べる果實あれば英才の人といへども徒らに欲して得べきものあらず凡そ事始めに難くして終りに易からざるものなし容易は困難よりして生ずるなり

明の王陽明十一歳の時人生第一の事を問ふ

中江藤樹十一歳にして聖を希ふ

元の許衡幼時學問の主旨を問ふ

第一　立志

(1)明の王陽明年十一塾師に問て曰く何をか第一等の事と爲す塾師言ふ書を讀み登第するのみ陽明の曰く此れ未だ第一の事と爲さず第一の事は其れ聖賢たるか

(2)中江藤樹名は原童卯の時已に老成人の如し年甫て十一大學を讀み自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本の章に至り慨然として歎ト て曰く幸なる哉此の經の今に存する事聖人豈學て而して至るべからざらんや

(3)元の許衡七八歳學を鄉師に受く書輙ち目を過て忘れず一日其師に問て曰く書を讀む何を爲さんと欲す師の曰く當さい舉に應するにあらんとす曰く斯くの如きのみか師大に之を奇とす其父に謂て曰く此兒穎悟他日必ず大に人に過る者あらん吾れ之れが師たる能はずと固辭して而して去る後ち元に仕へ大學士と爲り魏國公に封せらる

宋の宗慤少時の大志

蜀の劉先主幼時の志意

新井白石三歳にして天下一の字を書す

奮然學に志す

(4)宋の宗慤小時叔父小文其の志す所を問ふ慤答て曰く願くば長風に乘ト萬里の浪を破らん

(5)蜀の先主劉備其の舍の傍らに桑樹あり童々として小車蓋の如し先主少時諸宗兒と戲れて曰く吾れ當さに此の羽葆車に乘るべし

(6)新井白石名は君美白石は其號なり生れて而して岐嶷聰慧にして三歳能く字を寫し毎に天下一の字を書す人以て英物と爲せり稍長ト倜儻不羈自ら膽氣を負み嘗て慨然として歎ト て曰く大丈夫生て封侯たることを得ずんば死して當さに閻羅たるべし既にして而して節を折り書を讀む河村端軒といふ者あり家富み且つ多く書を藏せり白石乃ち就て借閲す瑞軒其神姿を愛重し其女を納れ婦と爲し且つ三千金を以て勤學の資と爲さんことを請ふ白石皆之れを謝し家益貧して學益勤めしと云ふ

(7)源義經小字は牛若幼にして鞍馬寺の僧覺日に依れり人と爲り軀幹短小神形秀發にして趫捷人に過ぎたり十一歳の時諸家の系譜を閲

源義經十一歲にして平氏を亡ぼすの志を起す

後漢の郭丹學成り國に歸り前言を果たす

漢の終軍十八歲にして博士と爲る

し慨然としておもへらく我れ世々將種覆墜此に至りしか必ず當さに平氏を剪滅し父祖の恥を雪ぐべしと是れより書を讀み夜は劍搏を習ふ覺日測度を勸めしかど肯はずして曰く二兄僧と爲る我れ己に之を恥づ何ぞ之れに倣ふ事をせんや

(8) 後漢の郭丹幼にして孤、孝順あり後母之を愛憐しために衣裝を鬻き産業を立つ後ち師を長安に從ひ符を買て函谷關に入る乃ち慨然として曰く丹、使車の車に乘らずんば終に關を出でずと既に京師に學び常に都講と爲る諸儒皆之を敬重す後ち諫議太夫と爲る節を持し使して南陽に歸る果して其の志の如し

(9) 漢の終軍少ふして學を好み辨博にして能文を以て郡中に聞ゆ年十八帝選拔して博士と爲す歩して關に入る關吏軍に繻を與ふ軍問ふ之れを以て何にかする吏の曰く復傳を爲す還るとき當さに符を合すべし軍の曰く丈夫西遊す終に復傳を以て還らずと繻を棄て而して去る謁者と爲り使して郡國を行るに及て節を建て東し關を出づ關吏之を識て曰く此の使者乃ち前きの

印度のバスチンゲス幼時の一念を遂す

英のマイケール十三歲の時已に獨立の生活を爲す

棄繻生あり後ち諫議太夫に擢でらる

(10) 印度のバスチンゲスといふ人元來鉅族なりしが次第に衰へ父は貧しき農民と爲れり其の七歲の時また〳〵祖先の所領ありし地を過ぎ如何にもして此の田產を恢復せばやと思ひ起せしが其長ずるに及て擧止沈靜心志剛毅にして果して幼時の一念を成就せり

(11) 最も困難の事情に會し非常の勉勵忍耐を以て其志を達し青年の模範たる者マイケール、ファラデーある者に若くは莫し（原著者の評語に係る）マイケール一千七百九十一年英國某の地に生る幼にして小學普通課を修め其餘自力獨學に由り諸學課を修む父有德の士たりマイケール父の善行に薰陶（感化）せられ幼にして敎法を信ト修身の道を講す年十三自己の生活は自己の勞動に依らざるべからざると悟り自ら請ふて新聞配達者と爲り四方に奔走し而して安息日は則ち說敎を聞く事を樂むマイケール快樂困苦之を一身に滴用す雇期已に滿つ更に七年を約し而して專心一意師に從て釘書業を學ぶ餘暇あれば則ち之を讀書に用ひ終に其志を達し名を成す當時マイケール備忘錄を制

英のクーパー幼にして豪邁不羈

十三歳の時危急の大傷人を救ふ

し其見聞する所の要點に至ては則ち悉く之を錄し演說を聞くが如きも亦之を錄し自ら之れが挿畫を爲し細かに說明せしと云ふ

(12)

サー、アストレー、クーパー幼にして豪邁不羈文事より寧ろ武事を好み頗る惡戲に耽りたり學齡に及びたれば父母一師を聘し普通の學課を授けしめたれども差したる進歩の兆候も見えざるとかや茲にアストレー漸く十三歳の時其緣家の一人一日大傷を蒙り動脈を破り出血甚しく生命にも係る程の事ありしに生惡醫師とても居らず一家の人々如何はせんと只々恐れ周章る斗りにて何たる手段も付かざりしがアストレー此報を聞き馳せゆき見るに斯くの次第なれば諸人の狼狽を怒り恐るゝ氣色もなく其手拭を以て緊しく傷口を壓扼して出血を止め終に一人の生命を救ひたりし氏が祖父幷に伯父は共に醫家にして名聲高く人にも崇られ自らも裕かに暮らしければアストレー竊に欽羨の情を起し居たる所今大人さへ爲す術を知らざりし重傷人を救ひし手際に自分ながら感心し吾れにして今よりこれを勉めなば祖父伯父の地位に到る能はざらんやと思ひ起し

十六歳にして確然醫學に志す

博覽雄辯を以て名聲を揚ぐ

パロチットの爵を拜し外科大學校の長と爲る

十六歳の時に至り確然志を定め伯父の許に往き醫を學び後ちクラインといふ人の許に移り只管業を勉勵せしかば忽ち進歩の兆候を現はしたりクライン一日アストレーをして人の腕を解剖せしめしに種々工風をめくらし終に解剖し了り師の査檢を乞ふ師大に其周密精到なるを稱せり休課の時已が邸宅に歸りたるに兩親氏が快活放恣の氣質今は一變して嚴莊端正の人と爲りけるを見將た學業大に進歩し多くの書生中に雙ぶ人もなき由を聞き其喜び極りなく心を盡くして待遇せしとまたクラインの許に還て後ちは只管病理解剖學を研究し他日大發明の基礎を置けり千七百八十七年エディンバラ府の大學校に入り僅か七ヶ月の後選ばれて醫學會社の社員と爲る博學雄辯を以て忽ち名を揚けたり龍動府に於て一病院の檢査官を拜し後ちクライン氏と共に講義者と爲り自ら一法を立て是れまで外科と解剖とは一科として講せし定規を改め二科に分て述べたり千八百年其伯父の後を紹で某の病院の醫員と爲り後終にパロチットの級爵を拜し暫くして外科大學校の長に任せられたり

英のパンクス事に感じて志を起す

(13) サー、ヴ■セッフパンクス一千七百四十三年を以て英國龍動に生る九歳にして某の小學校に入り居る事四年にしてエトン校に移り初めの程は只管遊戯に耽て課業を修めずありけるが不圖したる事より俄に心思を改め刻苦勉勵終に天下屈指の博物家と成るに至れり一日其朋友と共に游泳に行きけるにパンクス興に乘ずて遊び戯れ諸友各〻立還りし後ちまでも遊び居たりやがて歸る時恰も暮鐘山川を渡て淡靄樹を抹し野芳露を含で微風花を襲ひ異香鼻を穿ち實に言語筆紙に盡すべくもあらぬ美景を觀て大に感ず美あるかな美なる哉と賞讃しつゝ暫し茫然としてありけるが忽ち心に思ひ浮びしはかくまで目を娛ましめ心を慰むる花木野芳の名を學ぶこそ最面白き事あらめ云かれども人の子として父母の命に背くは道ならず是非とも專一に學校の課目を講せざるべからず嗚呼如何にせば可ならんか今より無益の遊戯を止め課業の餘暇を以て學ばんものをと茲に心を一定し先づ植物の名目用途を習らひ是れまで遊戯に名を得しパンクル急に勉强を仕始めす時の暇もおく勵みければ敎師朋友

夥大の遺産を受て益〻志を勵ます

一千七百九十五年内閣顧問と爲る

皆不思儀の思ひを抱きける偖もパンクスは益〻出精して課業を修め餘暇ある時は必ず野外に出てゝ諸種の草木昆虫を取集め其名と用とを講習するを以て何より愉快の事となしたりけり十八歳の時父親死亡し夥大の遺産を受けたり凡そ財産裕かなれば勉勵の志を擲ち怠惰に陷るは世間の人情なれども■パンクスは益〻其志せる學業を勵み猶それより某の校に入りたるに當時植物學の講義なかりしかば校長に建議して此課を設けん事を請ひ該博なる植物家を聘し其敎授を受け大に益と得學業益〻進み經驗愈〻富み後ちパロチットの爵を拜し千七百九十五年内閣顧問と爲る

帝舜の大孝

第二　孝悌

(14) 帝舜父を瞽瞍と云ふ瞽瞍後妻に惑ひ少子象を愛し常に舜を殺さんと欲し之れをして廩を完めしめ階を捐て井を浚らはしめ從て之れを掩ふ舜能く之を免かれ孝悌の道を盡くし遂に頑父傲弟をして各其所を得せしむ孟子の曰く大孝は身を終るまで父母を慕ふ我れ大

山田古嗣幼にして篤孝

閔損の至孝後母を感化す

伯愈母の力の衰ふるを歎く

丈部石勝の三兒の孝志

舜に於て之を見る

(15) 山田古嗣性篤孝幼にして母を喪ふ從母に敬事す後ち父の憂に遭ひ哀毀禮に過ぐ嘗て書を讀み樹欲靜而風不止子欲養而親不在に至る流涕禁せず卷帙之れがために沾濕す

(16) 閔損早く母を喪ふ父後妻を娶り二子を生む損至孝怠らず母之れを疾み己れが生む所の子は綿絮を以て之れに衣せ損には蘆花絮を以てす父冬日損をして車を御せしむ體寒えて轡を失す父之を責む損自ら理せず父之を察知し後母を逐はんと欲す損泣て父に啓して曰く母在れば一子寒し母去れば三子單あり父之を善として而して止む母も亦悔ゐ改め遂に慈母と成る

(17) 伯愈過ちあり其母之を笞つ泣く母の曰く他日子を笞つに未だ嘗て泣かず今泣くは何ぞや對て曰く他日笞たる常に痛めり今母の力痛ましむること能はず是を以て泣く

(18) 丈部石勝罪あり流に當る其兒祖丸年十二安頭九つ乙丸七つ闕に詣て伏して請ふ三人官奴と爲り父の罪を贖はんと時の帝其孝志に感

前漢の時少女緹縈父の罪を贖ふ

稱逸勢の女の至孝

漢の江革少時母を負ふて亂を避がる

し特に命ずて石勝の罪を釋し給ふ

(19) 漢の孝文帝の時淳于意と云ふ者罪あり刑に當す少女緹縈上書して曰く死者復た生くべからず刑者復た屬すべからず願くば沒入して官婢と爲り以て父の刑を贖はん帝其の意を憐み詔して肉刑を除き給ふ

(20) 橘逸勢の女至性あり逸勢罪を得貶に遭ふに及び悲泣徒步之れに從ふ監護の者叱して而して去らしむ女乃ち晝伏して夜行き遂に相離れざる事を得逸勢死するに及て乃ち屍を收め之れを葬り其側に廬し守て而して去らず落飾尼と爲り誦念苦至晨夕懈らず見る者之れがために流涕す後ちまた其屍を負ひ京に歸へる皆之を異とし稱して孝女といふ

(21) 漢の江革少して父を喪ひ獨り母と居る天下亂れて盜賊並び起るに遭ふ革母を負ふて難を逃れ備さに險阻を經常に採拾して以て養ひを致す數賊に遇ふ或は刼して將ひ去らんとす革輙ち涕泣して哀を求め老母ありといふに至り辭氣懇款にして人を感動す賊是を以て

之を犯すに忍びず或は乃ち兵を避るの方を指示す遂に俱に難に全き事を得たり裸跣行傭して以て母に便あるの物畢く給せざること久し建武の末鄉里に歸へる母老ひたるを以て其動搖することを恐れ自ら轅中に在て車を輓き牛馬を用ひず是に由て鄉里江巨孝と稱す仕へて司空長史と爲る天子之を崇礼し諫議大夫に拜す後ち官を辭す八月を以て長吏存問し羊酒を致し其身を終へしむ巨孝の稱天下に行はる

後漢の黃香幼時の至孝

(22) 後漢の黃香九歲にして母を喪ひ思慕骨立す父に事へて力を竭くし養ひを致す暑には則ち床枕を仰き寒には則ち身を以て席を溫む和帝之を嘉みし特に異賜を加ふ香博く經典を學び道術を精究し文章を能くす京師號して曰く天下無雙江夏黃童仕へて尙書令魏郡の太守に至る

晉の王延親に事へて色養す

(23) 晉の王延親に事へて色養す夏は則ち枕席を扇き冬は則ち身を以て被を溫む隆冬盛寒體には全衣無くして而して親には滋味を極む

吳の孟仁少時孝

(24) 吳の孟仁本とその名は宗少して李肅に從て學ぶ母ために厚蓐大被を作り曰く小兒德の客を致すおし學者多くは貧し庶くは氣類と之を共にする事を得ん宗書を讀む夙夜懈らず肅之を奇として曰く卿は宰相の器あり監池の司馬に除す自ら能く網を結び手づから魚を捕へ餠を作り以て母に寄す母之を送還して曰く汝魚官と爲りて而して餠を以て我れに寄す嫌ひを避くる所以にあらざるあり吳の命に遷るに及び時物を得る毎に未だ以て母に寄せざれば常に先づ食はず

相の器と稱せらる

魏の王脩の哀念隣里の社祭を止む

(25) 魏の王修年七歲にして母を喪ふ社日を以て亡す來歲隣里の社に脩母を感念し哀ひこと甚だし鄉里之れがために社を罷む後ち太祖曹操南皮を破るとき脩が家を閔するに穀十斛に滿たず書は則ち數百卷あり太祖歎して曰く士妄りに名あらずと乃ち辟して司空掾と爲す魏郡太守に移る治を爲す强を抑へ弱を扶く百姓之を稱す

晉の吳隱之悲哀隣人を感動す

(26) 晉の吳隱之弱冠にして而して介立清操あり年十余父の憂に丁り號泣する毎に人之れがために流涕す母に事へ孝謹其の喪を執るに及で哀毀體に過ぐ其居太常韓康伯と隣たり康伯の母は賢明の婦人な

り其哭するを聞く毎に粲を輟め箸を投ト之れがために悲泣す康伯に謂て曰く汝若し銓衡（吏部の任官に居らば當さに此くの如き輩の人を舉くべし康伯吏部尚書と爲るに及で隱之遂に清級に階す）

晋の王祥の孝感

(27) 晋の王祥性孝なり蚤く母を喪ふ繼母朱氏慈あらず數〻之を譖つ是を以て愛を父に失ふ常に牛下（牛糞なり）を掃除せしむ祥愈〻恭謹なり父母病ある時は衣帶を解かず湯藥必ず親ら嘗む母嘗て生魚を欲す時に天寒くして氷凍る祥衣を解き將さに氷を剖て之を求めんとす氷忽ち自ら解け雙鯉躍り出づ之を持して而して歸へる母又た黄雀の炙を思ふ復た雀數十あり飛て其幕に入るまた以て母に供す鄉里驚歎して以て孝感の致す所と爲す丹柰あり實を結ぶ母命ト て之を守らしむ風雨毎に祥輙ち樹を抱て而して泣く其篤孝純至なること此の如し

晋の王覽幼時其母を諫む

(28) 王祥が弟覽は其後母朱氏の出あり朱氏祥に遇する無道覽年數歲祥が楚撻（むごくうたる）せらるゝを見輙ち涕泣して抱持す成童に至り毎に母を諫む因て少しく凶虐を止む朱數〻非理を以て祥を使へば覽祥と共にし後ち兄弟各〻妻を娶るに及び朱祥が妻を虐使すれば覽が妻も亦趨て而して之を共にす朱之を患て乃ち止む

後漢の彭修幼時盜帥を支へて父を救ふ

(29) 後漢の彭修年十五父盜のために刼さる修刀を拔き盜帥を支ゆ曰く父辱めらるれば子死す盜帥の曰く是れ義童なりと辭謝して去る

藤原邦光十三歲にして父の仇を報す

(30) 藤原邦光權中言資朝の子なり元享三年北條高時資朝を佐渡に流す本間某をして之を幽せしむ後ち命して之れを殺す邦光時に年十三父將さに殺されんとすと聞き母に往て見ん事を請ふ母之れを止む固く請ふ再三佐渡に至る一老僧をして某に告けしめ苦（ねんごろ）に一たび其父を見ん事を請ふ許さず既にして而して殺さる一夕風雨晦冥邦光其室に入る此夜本間外に在り族子三郎獨り臥す是れ父を手刃する者室中を窺ひ覗る明燈耿々（あかく）として傍ら人なし時に飛蛾紙窗に群集す窗を開く蛾入燈滅す障を排し直ちに進み足を擧げ枕を蹴る三郎驚き覺む刺して之を殺す父の仇を報ト遂に京師に歸へる

明の劉謹十四歲にして萬里父の讖所を訪ふ

(31) 明の劉謹父法に坐し雲南に戍（徵役）たり謹方さに六歲家人に問ふ雲南何くに在る家人西南を指示（かゝり）す輙ち朝夕之れに向て拜す年十四瞿然（驚懼）顏（の）として曰く雲南萬里といへども天下豈父なきの子あらんやと自

ら奮て而して往く六月を閲へ其地に抵る父に逆旅に遇ふ抱持して號慟し身を以て代らんことを乞ふ法に於て邊に戍たる者十六以上にあらざれば代ふる事を許さず後ち父を奉ト還へる事を得孝養身を終る

南宋の陳遺孝志のために難を避れて母に逢ふ

(32)

南宋の陳遺少して郡吏と爲る母好で鐺底の焦飯を食ふ遺役にあり常に囊を帶び飯を炊く毎に輒ち其焦を盛り以て母に貽る後ち孫恩が亂起りし時聚めて數升を得常に帶て自ら隨ふ衆敗走逃竄し餓死する者多し遺ために獨り自ら活し遂に母に遭ふ事を得

孝子龜松十一歳にして巨狼を斃す

(33)

孝子龜松信濃佐久郡内山村の人家貧し父傭を爲す信毛の界に破風山あり灌莽數里に亘り豺狼稼を害す一日龜松父に從ひ往て之を守る日暮龜松木を屋後に採る父爐前に在り飯を炊しく俄に巨狼入て其脚を噛む父大に呼て曰く龜何くに在る龜松聲に應ト て來り大に驚き鎌もて狼の口を貫く柄折る狼傷き益〻怒る又た手石を擧げ鎌背を槌す深く入る事數寸大に吼る一聲終に斃る龜松顧て父を視れば創甚しく起つ能はず負て而して歸へる藥を傳く數日愈ることを得た

孝子太郎八兄妹の純孝

たり時に龜松年十一縣吏陳情書の署に云く龜松髫齔の少年羸弱にして縛雞の力なし而して手つから猛獸を搏し父を萬死に救ふ孝にして勇なる者にあらずんば安ぞ能く此の如くあらん請ふ褒賞以て人子たる者を勸めん上司旨を傳へ其請に從ふ時に天明八年九月と云ふ

(34)

薩摩の鹿兒島郡小山田村に孝子あり兄を太郎八といひ妹を萬龜といふ太郎甫て九歳妹七歳母產を傷み未だ復せず强ひて耕事に服す益〻劇し臥蓐六年轉側する能はず兄妹左右扶持し飲食衣服周到あらざるはなし常に母に事ふる意の如くならざるを慮り益〻煩苦苟も母の呼ぶに逢ふ二子答て曰く唯一口に出るが如し太郎父と出て耕す妹を留めて之を視せしめ必ず誡て曰く母の言に違ふ事勿れと晩に歸へり走て其側に至り臂を摩し頰を撫し安否を慰問し獲る所の粟米を出し示して曰く年豐なる此の如し憂ひ無きなりと頃刻側を離れず動もすれば則ち食を忘る夏夜熱甚し寸歩も移さず母の曰く汝終日勞困盡ぞ少しく憩はざる笑て曰く母の恙おきを視る猶憩ふが如きなり母寢に就く妹と左右に臥す耳を側て其息を伺ふ少しく微

兄妹國守の賞賜を受く

なれば則ち之に觸れ異なるなければ乃ち止む冬寒甚しく母脚を懷に置き之れを溫む中夜痛苦する事あれば二人決起其背を按ず藥喉を下らず口に含て之を送る少間猶ほ床を繞り彷徨失ふあるを恐るるものゝ如し隣里之を稱す天明元年八月藩の郡宰得能某公事を以て小山田村を過ぐ一少年草を薙く者あり吏の至るを見一拜起て鎌を揮ふて已まず某之れを奇とす里長進て曰く是れ孝子なり因て詳かに之れに告く某之れを隣里に詢ふ皆間言なし乃ち自ら其廬に至り之を見遂に狀を具して聞す藩主太郎八に粟二十五包萬龜に錢五貫文を賜ふ馬數頭に駄し之を致す又た命して隣里の民に其家に就き之れを賀せしむ遠邇相傳へ物を贈り慶を爲す遂に兄を名けて孝太郎といひ妹を阿孝といふ後ち一年母歿す隣里來て其葬を助く兄妹屍上に伏して動かず曰く請ふ數日を待て其至性此くの如し

(35)

桂屋太郎兵衛の五子の篤孝

涙華堀江に遭運を業とする桂屋太郎兵衛といふ者あり元文元年米を涙華に海運す颶に逢ひ其半を失ふ船頭某太郎兵衛と謀り乃ち其殘包を賃にし歸り謾て曰く皆之を失ふと而して竊に太郎兵と其金を私す事發覺し船頭某逸去す太郎兵を獄に繫く罪を論し斬に處す

る日あり太郎兵二子三女あり長女を市と曰ふ年十四次を松といふ十二次を季といふ八つ其長男を長四郎といふ他人の子を取り之を養ふ者年十三季男生る六歲父の死を聞き皆慟哭食はず三年十一月十三日一家寢に就く獨り市屐轉睫を交えず中夜起立天を仰て長吁し乃ち燭を執り書を作る未だ數行ならず松の呻るを聞く顧みて曰く妹盍ぞ睡らざる松嗚咽して曰く阿姉と市急に袖もて其口を掩て曰く止めよ幼者をして知らしむる事勿れ乃ち其書を示して曰く汝父を見んと欲するか吾れ父に代て死なん此れ訴狀なり妹泣て同く死ぬん事を請ふ姉の曰く長四郎は義子あり同く死するに忍びず吾れ二妹一弟と往て之を請はん書成る廳所を知らず乃ち長四を呼び起して導と爲す時に天色墨の如く寒風膚を裂く府門に至るに及び天明く長四を遣歸へす長四肯はずして曰く吾れも亦子あり乃ち共に入る吏之を呵す去らず泣益〻悲し吏も亦泣く之れを市尹に聞す市尹命ずて與ふるに錢を以てし好言慰去す五子皆頭を棹て曰く奴等町奉行

五子の孝感父の死を救ふ

父の命を請ふのみと地に伏して起たず乃ち里長を召し之れに付す明日市尹、鎮臺府太田備中守に白す備中守深く之れを異とす然れども人の之を指敎するを疑ひ乃ち自ら市尹廳に至り五子を廷に召し梏具を列し刑を行ふの狀を爲して曰く汝等父を見んと欲し若し父に代て死せば終に見る事を得ざるあり姉進て曰く父にして而して免るゝ事を得ば見ずといへども恨みあきなり吏刑具を示して曰く汝此の痛苦を受るや否や曰く甘ト て之を受けん屢問ふ變せず長四に問ふ汝は如何曰く奴別に請ふ事あり乃ち書を懷より出し（長四書を懷に せし事突然の如くなれど暫く原文に因りこれを存す）之れを呈して曰く奴義子たるも恩豈異あるあらん且つ女子或は母に代らん父は則ち男子にあらずんゝ請ふべからず奴を以て之に代へよ二妹に問ふ二妹色を變ト て言はず季男に問ふ頭を掉て答へず死を期して動かざるもの、如し觀る者皆泣く將さに刑せられんとするの日鎮臺五子を召して曰く汝の父刑に當す吾れ、特に汝等の至孝と憐み暫く之を停め命を江戸に請ふ四年三月朝廷大赦會を行ひ天下に大赦す鎮臺五子を召して曰く汝

倉父其子に感化して廉者と爲る

日本武尊十六歲にして賊帥を斃す

の父死を免かる是れ汝等孝感の致す所なり乃ち太郎兵衛の縛を解き之れを五子に付す父子相抱て而して泣く後ち太郎兵衛廉直を以て稱せらる蓋し其子に化せらるゝなり

第三　剛毅

(26) 日本武尊幼にして雄豪壯あるに及て容貌魁偉にして身の長け一丈力能く鼎を扛るに耐へたり熊襲の反せし時命年十六なりし父の帝尊をして之れを討せしめ給ふ時に賊魁川上梟帥其の族を宴す尊之れを探知し髪を被り裝ひて童女の狀と爲り劒を裀中に藏め密かに入て其婦女と雜處す梟帥之れを悅び杯を屬し戲狎す夜闌にして宴散ず尊乃ち劒もて其胸を刺す（氣に入り）未だ殊せず（いきられぬ）云へらく姑く之れを待て汝誰れたるぞ尊告るに實を以てす梟帥更らに云へらく我れ勇强衆を歷せしも未だ皇子の如き者を見ず吾れ賤陋といへども願くば尊號を上つらん尊之れを諾す曰く今より應さに日本武尊と稱せらるべしと言ひ訖り刺して之を殺す是れに由て世日本武尊と稱すとな

鎌倉權五郎十六歳にして勇三軍を掩ふ

(37) 鎌倉權五郎景政勇武絶倫嘗て軍に源義家に從ふ景政先鋒たり敵のんために射らる矢其目に集つ即ち自ら其敵を射殺し冑を脱して而して臥す三浦爲繼といふ者矢を拔かんと足もて其面を蹋む景政驚起爲繼を斬らんとす爲繼驚て其故を問ふ景政の曰く命を鋒鏑に隕す乃ち士の常生て而して面を蹈まる汙辱此れより甚しきはなし爲繼敬謝し跪て而して之を拔く景政時に年十六

藤原道長幼時の沈勇

(38) 花山帝の時藤原道長二兄道隆道兼と少して同トく郎と爲る一夕雨ふる皆上の前に在り譚怪事に及ぶ談酣に坐ろに畏怖を懷く上の曰く誰れか此の闇黒を冒し能く無人の處に詣る者わらんや道長の曰く臣詣るべし上之を壯とす乃ち兄弟三人に命トて曰く道隆は宜しく豐樂院に往くべし道兼は仁壽殿道長は大極殿と向ふ所已に定まる時己に三更二兄畏縮己む事を得ずして而して起つ道長の曰く願くば左右の小剪刀を假らん當さに證を取り來るべし乃ち去る俄頃に二兄各走り歸て曰く途已に怪を見る前ひとを得ずと面色土の如

足利義詮幼時の言動

し上大に之れを拍笑したまふ良久ふして道長徐かに還り即ち小木片を上り以て信となす曰く是れ大極殿御牀南面下柱の片ありと上驗せしめ給ふ果して然り二兄大に慚づ

(39) 源顯家鎌倉を攻む足利義詮之れを拒く敗れ還る顯家勝に乘トて鎌倉に入る諸將之れを避けんと欲す義詮時に年十一諸將を叱して曰く勝敗は兵家の常即し敵を怖る將たらざるに若かず義詮此に在り衆を望て而して逃がる天下之れを何とか謂はん

黒田長政十歳の時の舉動

(40) 賤岳の戰中川清秀敗死し諸砦皆懼る結束退かんと欲す此の時黒田孝高も亦一砦を守る其支ゆべからざるを知り自ら死と決し其臣某をして幼子長政を護し逃れしめ以て祀を存せんことを謀る某勉强命を開く已に往く長政途にして問て曰く我れを率て何くに往く某泣て實を告く長政驚て曰く大人常に兒を戒めて云く武夫の子は進む有て退く勿れと今にして而して逃る是れ平生の戒めに負くあり馬に策て馳還へる是れ其の十歳の時の事に係る

(41) 本田忠勝平八郎と稱す幼にして勇健嘗て叔父忠眞と共に德川家康

本田平八郎幼時敵兵を鏖す

十四歳の時詳聚を喝伏す

徳川頼宣十四歳の時の言動

に軍に從ふ忠眞時に槍を揮ひ敵一人を殪し忠勝を顧みて曰く之を馘せよ忠勝奮然對て曰く童子人に因て事を爲す者にあらずと進み擊て一人を斬り首級を獲て還る忠眞家康に白ふして曰く平八幼なりといへども膽氣用ふべし家康大に悅ぶまた家康尾張に往く忠勝從ひ清須に抵り將さに門に入らんとす尾人儀衞を觀る者重沓喧嘩す忠勝眉尖刀を揮ひ進て馬首に當り叱して曰く吾が君此に在り若等胡ぞ無禮なる衆皆讐伏す忠勝時に年十四

(42) 大坂の役德川家康の子頼宣後軍より馳せ諸軍の輜重路に屬し爭ひ進むを見る頼宣の曰く是れ軍既に捷ち將さに舍せんとするあり已にして天主烟舉る頼宣咄嗟して進む茶臼山に至れば則ち諸將賀する者大に聚る頼宣淚を攬て曰く大人兒を後軍に置き事に及ばざらしむ松平正綱傍らに在り曰く君十四歳前途甚だ遠し功を建てざる事を患へず頼宣色を變て曰く吾れ復た十四歳あるか家康の曰く汝が此言以て首功に當るに足れり

(43) 長湫の役成瀨小吉年甫めて十七獨騎馳て敵中に入り首一級を獲て

成瀨小吉十七歳にして將帥と爲る

堀三十郎幼時の沈着

而して返り之れを德川家康の馬前に致す家康之を壯とす既にして前隊の辟易するを見復た馳せ出づ從者轡を援り之れを止めて曰く君功既に成れり死を敵に送る爲る勿れ小吉怒て曰く小利に安んゝて大義を失ふ武夫の恥る所宜しく全捷を得て而して後止むべし豈一首級を以て自ら足れりとせんや家康呼て曰く前隊馬足亂る是れ壯士死戰の秋從者未だ轡を放つに及ばず小吉直ちに馳て敵に入り大に呼て我が軍を勵ます軍之れがために奮ふ遂に大捷を得たり家康大ゐ其功を賞して曰く汝今日の擧老將宿帥といへども過る能はず蓋し德川氏麾下成童將と成る者小吉一人と云ふ

(44) 關白豐臣秀吉一夕茶房に入り茶伯千利休の靈を見る既にして而して起て便室に入り侍豎堀三十郎を呼び之を戒て曰く利休の靈彼れに在り汝且つ往て叱せよ三十郎唯々即ち往く先づ廡下の戶牖を牢鎖し而して後ち房に入り遍く之れを索む復た一の形影あし乃ち復命して曰く靈已に去れり以て意と爲す勿れ此時三十郎齡僅かに十五容姿端麗にして而して辭氣從容公大に歎賞し賜ふに紫袍一領を

以てす

甲賀孫兵衛少時の沈斷

(45) 丹後守稻葉正登の介弟を式部といふ游蕩無賴羈束すべからず正登敎之を讓む悛めず正登積忿に勝へず遽かに侍臣甲賀孫兵衛に命ト往て之を斬らしむ孫兵衛固辭し且つ諫て曰く大叔固より罪なしと せず去かれども敢に從はざるの故を以て一旦刃を骨肉に推す後ち必ず臍を噬まん若かず且らく之れを紓るべ以て自新の路を啓かんには正登益〻怒て曰く汝怯懦事に堪えず汝を舍き豈使ふべき者あからんや孫兵衛淚數行下る曰く君侯臣を以て怯懦と爲す則ち臣敢て復た辭せず願くば監者一人を得ん正登之れを許す此時孫兵衛年甫て十六額髮面を被ひ鬖鬆憐むべし遂に監者と共に式部の邸に抵り具さに來る所以の狀を告ぐ是に於て式部盛氣劒を按ト之を正廳に待つ孫兵衛入る式部呼て曰く我れ久しく己に今日の事あるを知る去かるに汝乳臭何ぞ能く爲さん聲色共に厲し孫兵衛則ち佩刀を脫し之を後へに投ト膝行して而して進み跪て曰く少く安んトて躁く勿れ夫れ君の侯に於る分は君臣と雖ども親は則ち兄弟今日の事豈

荒木又右衛門幼時の沈剛

某の願ふ所あらんや然りといへども君命廢すべからずと直ちに起ち式部を捽し其劒を奪ひ之れを坐に伏せ匕首を懷よ　取り其胸に擬す左右驚愕之れを敢て救ふなし孫兵衛顧て監者に謂て曰く疾く歸て吾が公に告げよ臣の腰骨幸に未だ脫せずと因て徐かに式部を扶け起して曰く某公に報ずる所以のもの畢れり君第行れ某請ふ從はん遂に式部を奉ト而して野に遯がる草行露宿十數年式部病で死するに及て正登乃ち孫兵衛を召復へすと云ふ

(46) 荒木又右衛門大和郡山本多侯の臣なり天資英豪劒搏と以て世に鳴る十三四の比ひ一日同朋と山に入り鳥を捕ふ行く遠く日暮る將に歸らんとす又右衛門の曰く聞く此間大兒の在るありと請ふ別路を取らん一童の曰く苟も然り此れ吾が欲する所のみ子第我に從ひ來れ臂を攘ふて而して行く又右衛門之れに跡す此れより郡山城下に至る三里絕えて人家あし既にして夜人行已に絕ゆ樹木陰森谷深く月黑し忽ち窟間鼾息雷の如くなるを聞く一童の曰く果して是れあり我れ溺して而して之を驚かさん已に溺す賊驟起二童の機上に在る

希臘の歴山王幼時駿馬を馴馭す

を見曰く汝等小童何ぞ其豪膽ある我れ刧を爲す久し未だ汝等の如き沈剛の者を見ず此れより城下に至る途猶遠し我れために汝等を郊に送らん二童に尾して而して行く一童行々山姥の曲を謠ふ二三句にして而して語塞り聲顫ふ賊大に笑て曰く終に汝の本性を見る汝の剛は客氣のみ又右衛門に謂て曰く汝神氣安定眞に一敵國の如し我れ尾し而して來る者は意汝と稔察するに在るのみと賞歎之を久ふす此賊後ち由井正雪に黨し加藤市郎右衛門と呼ぶといふ

(47)

希臘王歴山王少なる時其父ヒリップ嘗て一俊馬を購し臣下善騎の者を以て乘試みさせしに一人も駕御し得る者あらざりし故ヒリップ連れ還るべしと命せし折歴山王自ら試ん事を乞ひ其已れの影に恐怖せし事を早く氣付きたりしかば之れを太陽に向はしめ忽ち跳び乘り馬は矢の如く童子を乘せつゝ駈け出たり之を見てヒリップ及び侍立せし人々童子の生命のために震慄せざるはなかりけり然るに世界に於て最も馴良なるものゝ如く或は右或は左縱横無碍に乘り廻りしかば觀る者大に驚歎せりヒリップ王を抱持し呼て曰く汝は別に他の

古勇士の軼事を樂聽し詩史ホメルを愛讀す

英のネルソン幼にして豪邁機敏

(48)

國を索めよゞッエドニーン（自國の名）は汝のために余り小なりとヒリップ當時の碩學某を聘し之れを教導發育せしめ頗る教育に意を注ぎしかば早く已に非常の才性を顯はしたり王幼時古代勇士の物語を聞く事を愛し且つ常にホメルといふ一の詩史を愛讀し夜は則ち枕底に置き眠覺むれは輒ち之を讀みたりし（ナポレチン幼時と同一嗜好）また父ヒリップの新捷を聞く毎に痛歎しつゝ私の父よ私に最早掠略すべき地を遺し置かしめぬかと呼ばはりしと

チルソン其名をホラシチといふ一千七百五十八年英國某の地に生る幼にして豪邁機敏其最も幼き頃一人の牧兒と共に鳥の巣を取らんと山に入て踏み迷ひ食事時になりても歸らざりければ父母の心配一方ならず四方に人を走らして搜索し漸く小川の湄にホラシチ攸然として腰打掛て休み居るを見出し伴れ歸りければ其祖母彼れに向ひ空腹にもありつらん怖ろしくもありつらん何故に早く歸らざりしかと問へば怖ろしきとは何事ぞや我れ怖ろしき事を見ずと云ひしとぞ九歳にして母を喪ひ後ち兄ウヰリヤムと共に某の學校に

大雪を冒して勇往の氣象を顯はす

寄宿して學びけるクリスマスの休日（十二月二十五日にして耶蘇降世の日なり）に父の許に至り復た學校に歸へる時兄弟各〻駒に打乘り出立しけれど雪深くして進みがたく中途より引還し父に此の由を語れど父は之を信ぜざるにや彼れ等に向ひて言ひけるは誠に路通せざれば是非もなし大概の事ならば强ひて往くべし其の能く難を侵して進むと堪へ兼て還るとは兩人の面目に任かせん是に於て兄弟再たび出發しけれど寒に雪深くして行旅甚だ難澁ありしかば兄のウヰリヤムは堪へかねて此の如き大雪に學校まで行く事最も難しいざ是れより家に還らんと云ひければホラシヲ聞入れず兄上は父の言葉を忘れ給ひしか往くと還るとは汝等の面目よ任すべしと言ひ給ひしにあらずや我れは是非とも學校まで行て我が面目を全ふすべしと雪を侵して進みたり十二歳の時またも學校の休業中家に歸て在りける日新聞紙にて其伯父某一軍艦に受任せし事を見之れよ乘船せんと欲する熱情止み難く兄ウヰリヤムを以て此事を父に請ひたるに父は其生來の多病迚も斯る烈しき事業に堪へざるを知りたれど彼一旦心を決せし上は諫說するも無益なりとて遂に其言を容れ自ら之れを龍動府まで伴ひ是れより馬車に乘せ該軍艦碇泊せし港へ行かしめたりそれより漸くにして伯父に面會せり流石のチルソンも初めの程は父や朋友の事あるを思ひ出す毎に故歸の慕はしさ限りなく涙を袖に浮べたり老後ゐ至るまで之れを忘れず少年の初めて乘船する者毎に深切を盡くせしとぞ暫くして該艦ハ運用停止の命を受けたればチルソン其後伯父の周旋を以て北極地方を發見せんと拔錨する船に乘り込み海中數〻危險に逢ひたれどチルソン毎に其勇氣と決斷とを現はしたり某の地方に至りし頃四面皆堅氷にして進むべからず是に於て小船を派航し通路を求めしむ此時チルソンも亦一小船の長と爲りて出掛けたるに他の小船海馬のために苦しめられてありければチルソン力を盡くして之を救助し諸人の感稱を博しけり其後チルソン夜に乘ゝて竊かに本船を下り諸方を徘徊し翌朝に至て大なる熊に出で逢ひ之を射止めんと鐵砲の臺尻を振あげ既に危く見えける時本船より遙かに之を見出し急に大砲を放ちければ熊

單身軍艦に搭す

力を盡して諸人の急難を救ふ

巨熊に逢ふて危險を使す

熱病に罹りて心身疲勞す

自ら勇氣を鼓して愛國の念を起す

は其響に驚て逃げさりチルソン危き一命を助かりけり船長嚴しく之を苛責し後ちいかなれば斯る危險を侵して顧みざりしやと問ひければ我れ熊皮を以て父への土產にせんと欲せしかど殘念にも取逃かせしと答へしとぞ是れより幾多の危險を經て滯りなく本國に歸航しそれよりまた東方に發航し印度に在る事十八ヶ月炎熱のためふ大病に罹りければ本國へ送り歸され永の病氣に心身疲勞し種々過ぎ越し方を思ひ遣り只管悲歎に沈みしが熟思ふ樣今は是れ一刻千金我身に取ては最も大切の時なり疾病のために空しく時日を消過することそ悲しけれ天の此身を捨てたまひしにやかくては迚も我が職業に熟達し名を顯す事覺束なしと獨り心を苦しめしが確と思ひ定め大丈夫何ぞ碌々啼泣する事をせんや我れ今より一勇剛の士と爲り君のため國のためには我が一命を拋つべしと急に愛國の念を起しかくて本國に着せし頃は病氣も稍快方に赴き暫くして全快しければ某の號の軍艦見習リユートナントを以てジブラルタルに行き次て千七百七十七年試驗を經てリユートナント官を得直ちに某の號

ナイルの大戰に功に因てバーロンの爵を拜す

臨終の快語

に乘ドてシヤマイカに發航せり是れ此英傑幼弱時代の概略にして是れより忽ち英名を世上に轟し長く青史に傳ふるに至れり

附記ナイルの大戰の前一日ネルソン其屬官に謂て曰く明日の今時は我れ戰沒せざれば必ず貴族に昇るべしと果して其言の如く功ふ因てバーロンの官爵を拜し年金二千磅を給はれり議院に於て或る人チルソンの官爵尙ほ其功に適せず宜く之を進むべしと唱へし時當時の宰相ピット氏對て曰くチルソン氏は世人の未だ其名も能く知らざる時既に古今未曾有の大勝を得たり爾來氏が姓名は英國と共に久しかるべきのみ官爵の高下何ぞ問ふに足らんやとコッペンハゲン、の戰後ウヰスカウトンの爵に叙せられ後ち四年にしてトラファルガルに最後の大勝を得るの時來れり此戰に大傷を被りたれど戰運我が軍に歸したる時に至るまで猶ほ視息し「神に謝す我れ我が職務を遂げたり」との一語を遺して遂に船中に死せり知るも知らざるも皆齊しく涙をこそ浮べけれ

先賢幼時言行錄

第四　顯異上

菅原道眞十一歲にして詩を賦す

(49) 菅原道眞參議是善の第三子なり幼して穎悟年甫めて十一是善試みに詩を賦せしめられしに道眞即ち賦して曰く月耀如晴雪梅花似照星可憐金鏡轉庭上玉房馨と是善歎ト て曰く蘭は苗にして芳ばしと信あるかな一日都良香の許を訪はる良香會射を講しゐたりおもへらく彼れ儒門の子あれば弓操る術あぞは心得居るべくもあらざれど此座に來かゝりし事なればとて卒一矢召されんやと弓矢を授けければ道眞否みもわへず一發して即ち中てられけり一座の人々賞歎したりしとあん

幼時射藝に通ず

聖德太子幼時の答語

(50) 聖德太子用明帝の皇子あり生れて而して能く言ひ聖智あり年數歲の時諸皇子宮中に集まり相戲れて口鬪す帝之れを聞き笞を取て立出たまふ諸皇子皆走り避け太子獨り祖で進み出ゝ帝汝何ぞ爾する事ぞと宣ひければ太子對て曰く天階だて丶而して升るべからず地穴して而して藏るべからず故に進で笞をうけ侍るなりと帝之れを異とし給ふ

嵯峨帝の第王十二歲にして射藝を能くす

(51) 嵯峨帝豐樂院に御し射を觀給ふ諸王及び群臣次を以て射る弟王時に年十二上戲れゐ謂て曰く弟小弱といへども男子は方さに弓矢を執るべし王命に應ト て而して起つ再發皆中る外祖坂上田村麻呂坐に在り王を抱て而して喜躍す

北條時宗十一歲にして射藝に達す

(52) 北條時宗時賴の子あり人と爲り强毅幼にして射を善くす宗尊親王嘗て大に極樂寺に射る小笠懸を觀んと欲す顧て諸士に命す敢て應ずる者なし時賴の曰く太郎之れを能くせん召して而して場に上す時宗時に年十一馬に跨て出で一發して中つ萬衆齊しく呼ぶ時賴の曰く此兒必ず負荷に任へん

(53) 細川頼之人と爲り勇畧あり且つ文を兼ね禪を好む其の十歲の時人々父頼春の許に會し武事を講論したりし折一人設し君命を奉ト て他方に趣き途にして父の讐に遇ふが如き事あらば忠孝の道孰れを

細川頼之十歳の時忠孝の道を論弁す

林羅山十四歳にして詳書を博覧す

本下順庵十三歳の時太平賦を作る

新井白石六歳にして書を誦す

取りて宜しからんと言ひ出でければ人々首を傾けて思惟し居たりしに頼之傍らに在て言ひけるは警あるものゝ如きは本と君に仕ふべからず君に事へて而して忠孝を論ずるはそも〳〵末なり

(54) 林羅山名は忠一名は信勝薙髪して道春と稱す生れて而して神彩秀徹年十四書を東山の僧房に讀む時喪亂に屬し書甚だ乏し羅山百方索借し諷誦毎に曙に達せり緇流碩學の輩試に疑義を問へば娓々として剖析し其心を饜飫す皆稱して神童と爲すといふ

(55) 木下順庵名は貞幹平安の人幼より彊記善く書を讀み字を寫す海大師見て而して之を撫して曰く此兒異質あり即ち教て以て法嗣と爲さんと欲す順庵從はず十三の時太平賦を作る詞旨淳正なり世以て國瑞と爲す大納言烏丸公之を後光明帝に上つる帝大に賞稱し給ふ

(56) 新井白石六歳にして書を誦せり七歳の比父母一日拉して戲劇を觀る白石一々記認し歸て之を語る其次序一も違ふ所なし父之を異として曰く是兒常にあらず他日才當さに文章に於て發すべし新井氏其れ興らんか

室鳩巣十五歳にして大學を進講す

山鹿素行八歳にして五經七書を讀む

十四歳にして詩を作り文を屬す

十六歳にして左傳禮記を講す

法深世の兒女藝道の熱心

(57) 室鳩巣名は直清備中の人幼にして而して聰悟書籍を耽嗜す年甫て十五加賀侯に官し一日大學章句を進講す侯歎ずして曰く眞の英物なり乃ち命ずて西の方京師に遊び木下順庵に從學せしむ是れより學日々に益〻精しく文日々に益進み木門原と俊傑の士多けれども皆鳩巣のために席を讓るといふ

(58) 山鹿素行名は高興陸奥會津の人素行生れて而して穎悟父に隨ひ江戸に家す八歳にして能く四書五經七書を讀み十四歳能く詩を作り文を屬す時に烏丸大納言光廣飛鳥井大納言雅宣京師より來たり居る素行を召見し詩文唱酬大に其奇才を賞せり十六歳人のために聘せられ四書及び左傳禮記を講す長するに及て卓犖豪宕にして曠世の才あり文武兼資名教を以て自ら任す武學を以て行はる

(59) 法深世琵琶を善くす其兒女年七歳ために小琵琶を作り與へて常に弄せしむ一日兒を誡る事あり怒て之れを奪ひ且つ曰く汝唯〻狂奔を事とす此れ既に汝に用ゐし兒心甚だ悲み數〻乳母をして謝し乞はしむ父猶ほ與へず會〻母に隨て鴨社に詣づ歸途母兒に問て曰く汝も亦

祈る所ありや兒の曰く願くば神の加護を得琵琶の妙に至らん事を父聞て之を愛憐し復た小琵琶を與ふ

太田道灌幼時の才敏

(60) 太田持資後ち髮を削り道灌と號す才性明達幼時父資清戯れに一紙を與ふ持資受けて之れを見る記するに驕者不久の語を以てす持資父に請て曰く願くば此傍に副記する事を得ん父の曰く好し持資筆を採り書して曰不驕不久と父心に之れを奇とし且つ之れを諗して曰く凡そ人の世に處する直きより貴きはなし汝愼て之れを領せよ持資の曰く唯、已にして而して次室にある所の屏風を携へ來り父に謂て曰く請ふ之れを見よ曲あれば則ち立ち直なれば則ち倒る此れ以て如何と爲す父益〻之れを奇とす蓋し世説に載する所の事を案出せしものか世説に云く王光祿如屏風屈伸隨俗

編者曰く藤原爲輔言へる事あり云く人應さに屏風を張るが如くあるべし小しく屈曲あり亦此れを以て立つ而して自ら嚴正を失はず若し直ちに方正あらん事を欲すれば則ち倒れ且つ事を作さずと持資の言蓋し此意にして而して言足らざるか或は記者の傳へて而して詳あらざるか

岡本半助幼時の才畧

(61) 井伊氏の臣岡本半助才名を以て聞ゆ幼時小兒性たり一日其の主掃部頭、家老菴原某の招飲に赴く半助之に從ふ當時世盛んに唐犬を畜ふ菴原も亦主家賜ふ所の唐犬を畜ふ掃部頭來り臨むに際し犬頻りに之れに吠ゆ掃部頭喜ばずして曰く犬善く主を知る而るに此の犬之を忘る且つ其耳長ふして醜し從士を顧て曰く其耳を斷れと半助忽ち玄關懸る所の鋏子馬の尾を鋏む具なりを取り來り謂て曰く主公先づ自ら之を試み給へと掃部頭一笑顏を解く又幼時彦根某の寺に大法會あり門に榜制札して曰く無緣之者不可入半助强ひて入らんと欲す僧之れを制するに榜子の言を以てす半助笑て曰く他人は女房と爲るべからざるか僧語塞がる此僧終身此答語を記し終に大悟を爲すといふ

京都の某兒の穎悟

(62) 板倉重宗京尹たる時祇園の祠に謁す祠前群童聚戯す一童邦訓を以て數字を呼て曰く一より九に至る語尾皆都の音を帶ぶ十獨り之れなき者は何ぞや群兒茫然其説を得ず一童あり年僅に九歲聲に應ド て曰く五の字既に都の音を重ぬ是れ十の字の之れなき所以なり重

宗聞て之を奇とし人をして之を召し來らしめ乃ち二餅餤を合し一團となし童子をして之を喰はしめ因て謂て曰く今喫する所上なるもの旨か下あるもの旨か童子沈吟忽ち手を拍ち呼て曰く今拍つ所右あるもの鳴るか左あるもの鳴るか重宗益〻之れを異とし舉て之れを左右に置き遂に近臣に列すといふ

井上蘭臺十二歳の時元旦詩を賦す

(63) 井上蘭臺名は通熙江戸の人幼にして頴敏學を好む年十二元日詩を賦して曰く天邊雲物改海上日華新先酌屠蘇酒趨庭獻老親と父之れを異とし期するに他日の盛名を以てす後ち林鳳岡の門に入り才學大に進む備前侯の辟に應し教授に任せらる

皆川淇園四五歳にして能く字を知る

(64) 皆川淇園名は愿京師の人生れて而して頴異四五歳にして能く字を知る父試みに杜甫の秋興八首を書して授く日あらずして誦を成す是れに由て讀書を課せしに一過して即ち記す其弟成章も亦夙慧父慨然として二子をして大成せしめんと欲す經史百家の書凡そ見聞を資け學識を長せしむべきものは隨て之を需求し當時の耆宿の以て啓發の益を得べき者は交通往來せしむ成章聞けば斯ち之を悟り目をあかす

十五歳にして韓客のために稱賛せらる

(65) 頼山陽通稱久太郎安藝の人幼にして鋭敏崭然頭角を見はす年甫て十三父春水祇役して江戸に在り詩を作り之に寄す柴野栗山之を見歎賞して曰く千秋の春水子あり之れをして實才たらしめず詞人たらしめんと欲するか宜しく史を讀み古今の事を知らしむべし會〻薩藩の文學赤崎某國に歸り廣島を過ぐ之れに諗するに前言を以てし且つ曰く史を讀む通鑑綱目より始めよ山陽感奮日々綱目を讀む然れども治亂の大勢を記するのみ書法發明等は之を讀むを屑しとせず栗山聞て而して益〻之れを奇とす

頼山陽幼時の識見

第五　頴異下

孔子見たる時嬉戯に俎豆を陳ぬ

(66) 孔子名は丘字は仲尼父を叔梁紇といふ母は顔氏尼山に禱て而して孔子を生む見たりし時嬉戯常に俎豆祭器を陳ね禮容を設け已に聖相を顯せり

宋の朱熹幼時沙上に八卦を畫す

(67) 宋の朱熹幼にして穎悟嘗て群兒と共に沙上に遊ぶ熹獨り端坐し指を以て沙に畫す蓋し八卦に視らふあり

宋の王儉幼にして手卷を釋てず

(68) 宋の王儉幼にして篤學手卷を釋てず袁粲之を見て曰く栝柏像章小にして已に棟梁の氣あり

唐の褚無量幼時の沈定

(69) 唐の褚無量幼にして經を受け墳典に刻意す家湖に濱す嘗て龍の出づるあり人皆走り觀る無量尚ほ幼し書を讀て聞かざるもの丶如し衆之を異とす

宋の魏了翁數歲にして千余言を誦す

(70) 宋の魏了翁年數歲日々千余言を誦す目を過ぎ再び覽ず時に神童と稱す

唐の蘇廷弱冠にして一覽千言に至る

(71) 唐の蘇廷弱冠にして敏悟一覽千言に至る輙ち誦を成す馬載之を稱して曰く所謂一日千里馬の後足なるに譬ふ

清の沈功宗十歲の時大臣論を作る

(72) 清の沈功宗十歲大臣論を著す稍長て風節を尚ぶ

宋の陸象山三四歲の時天地の限界を問ふ

(73) 宋の陸象山生れて而して穎異年三四歲其父賀に問て曰く天地何の究際する所ある父笑て而して答へず遂に思ひを深ふし寢食を忘る終る丶に至る總角に及で舉止常兒に殊なり見る者之を異とす

明の方孝孺七八歲にして文を著くす

(74) 明の方孝孺少ふして聰穎雙眸炯々として電の如し書を讀む一目十行俱に下る齠齔善く文を屬す鄉人之を小韓士といふ學士宋濂其の文を見之を薦む太祖靈芝甘露の文を試み太子に謂て曰く此れ異人あり留めて以て汝を輔けしめんむ

清の趙甸九歲の時詩を賦し飢を忘る

(75) 清の趙甸九歲の時父遊學して歸る會大雪家貧ふして火と舉る事能はず古書一幅を出し甸に命ト友の所に至り米に易へしむ得ず家人悵然たり甸戶を閉ぢ乃ち詩を吟ト て曰く吾家有古畫其價重連城不易街頭米歸來雪滿罌と父之を聞き笑て曰く子あり此くの如し飢るも亦何ぞ憾みん

後漢の孔融四歲にして禮讓を知る

(76) 後漢の孔融孔子二十世の孫幼にして異才あり兄弟七人融其第六子あり四歲の時甸に諸兄と共に梨棗を食へば輙ち小なるものを取る大人其故を問ふ答て曰く我は小兒法當さに小なる者を取るべし宗族之を奇とす十歲父に隨て京師に至る時に河南の尹李膺簡重妄りに士に接せず融門に造て曰く我れは是れ李君通家の子弟なりと門者之れを言ふ膺融を請ト問て曰く高明尊稱の祖父嘗て僕と舊誼あ取次ぐ

十歳の時の名辯

りや融の曰く然り祖君孔子李老君と德を同ふし義を比して而して相師友たり則ち融君と累世の通家と衆坐歎服す（一坐の人々）

梁の王泰幼時の知辨

(77) 梁の王泰幼にして敏悟學を好む數歳の時祖母諸孫姪を集め棗栗を牀に散ず群兒競て之れを取る泰獨り動かず祖母其故を問ふ曰く取らざるも自ら當さに賜はるべし

吳の諸葛恪幼時の妙案

(78) 吳の諸葛瑾長面にして驢に似たり孫權人をして一驢を牽かしめ而に題して曰く諸葛子瑜（瑾の字）の子恪坐に在り忽ち筆を把り之驢の二字を加ふ舉坐歎笑乃ち驢を恪に賜ふ

後漢の吳祐十二歳にして禍福の由來を辨ず

(79) 後漢の吳恢南海の太守と爲る其子祐年十二隨て官に到る恢青簡を殺ぎ以て經書を寫さんと欲す祐諫て曰く大人五嶺を踰越し遠く海濱に在り其俗誠に陋あり然れとも舊と珍怪多し上は朝家のために疑はれ下は勢家の注目する所此書若し成らば則ち之れを載する事兼輛ならん昔し馬援薏苡を以て謗りを起し（薏苡能く瘴氣を除ふ南方多く產す援之れを一輛以上車に載せ還る上書しあり曰く載せ還る所皆明珠文犀なり）王陽蠶衣を以て名を徼む（王陽官に在る車馬鮮美還徙處を去るに及て載る所蠶衣に過きず天下其の廉を稱す）嫌疑の間先賢の愼む所あり

後漢の黃琬七歳の時の名辯

恢乃ち止む其首を撫て丶曰く吳氏世々季子に乏しからず（吳の季札）

(80) 後漢の黃琬少ふして辯慧（利口）祖父瓊初め魏郡の太守爲り時に日食す京師見えず瓊狀を以て聞す太后詔して食する所の多少を問ふ瓊狀（喩形容しい）の以て答ふるおし琬年七歳傍らに在り曰く何ぞ日食の餘月の初めの如しと言はざる瓊大に驚き其言を以て詔に應ト深く之れを奇愛す稍長ドて名を京師に知らる仕へて司隸校尉と爲る司徒王允と姦魁董卓を誅せん事を謀り卓の部將のために害せらる

晉の明帝幼時臨機の答語

(81) 晉の明帝幼にして聰哲元帝のために寵異せらる年數歳嘗て膝前に坐置す長安の使來るに屬す因て帝に問て曰く汝日と長安と孰れか遠しと謂ふ對て曰く長安近し人長安より來るを見る日邊より來るを聞かず元帝之れを異とす他日群僚を宴し又之を問ふ帝の曰く日近し元帝愕然たり曰く何を以て問者の言に異なるか對て曰く目を舉れば日を見る未だ長安を見ず是れに由て益〻之れを奇とす長ずるに及て仁孝文辭を喜み武藝を善くす

唐の憲宗幼時不凡の答語

(82) 唐の憲宗六七歳の時皇孫たり德宗抱て膝上に置き戲れに謂て曰く

汝は是れ何人ぞ乃ち我が懷中に在る皇孫答て曰く是れ祇に是れ第三の天子と德宗驚喜す

清の孫奇逢少うして才辯あり

(83) 清の孫奇逢少うして聰慧口辯あり嘗て楊尙寶に謁す尙寶猝然問て曰く假へば圍城に在り外か救援を絶し內ち糧窮に乏し將さに之を若何せんとす奇逢即ち答て曰く效死勿去の語尙寶歎ㄊて曰く子の平生を見る時に年十四

清の沈家恒幼時言語の趣味

(84) 清の沈家恒總角の時嘗て父公趾と苑中に遊ぶ公趾の曰く名卉乏しからず何を以て淵明菊を愛す對て曰く淡ㄊして而して能く久しきあり父歎ㄊて曰く此兒語を出す人に可なり

晉の謝玄幼時の名答

(85) 晉の謝玄少ふして穎悟叔父安のために器重せらる安嘗て子姪に戒約して曰く爾等自ら善くせよ亦何ぞ人の事に預からんしかれども正さに其佳あらん事を欲す群子弟言ふ者ある事無し玄答て曰く譬へば芝蘭玉樹の如し其れをして庭階に生ぜしめん事を欲するのみ安悅べり後ち秦の符堅來寇せし時朝廷文武の良將と求む安乃ち玄を以て舉に應ず冠軍將軍に累進し前鋒都督と爲り大に堅

晉の陸雲六歲にして文を能くす

の衆を破り終に前將軍に進む

(86) 晉の陸雲六歲にして能く文を屬す性清正にして才理あり少ふして兄機と名を齊うす文章機に及ばずといへども玄かれども持論は之に過ぐ二陸と號す幼時吳の尙書閔鴻見て而して之を奇として曰く此の兒若し龍駒にあらずんば是れ鳳雛後ち賢良に擧げらる

晉の謝尙八歲の時の名辯

(87) 晉の謝尙八歲にして神悟夙成其父鯤嘗て之を携へ客を送る或人の曰く此兒一坐の顏回あり尙が曰く座に尼父あしいづくんぞ顏回を別たん席賓歎異す長するに及て音樂を善くし博く衆藝を綜べ仕へて衞將軍參騎常侍に至る

魏の鄧哀王幼時の智計

(88) 魏の鄧哀王冲武帝の子少うして聰察岐嶷五六歲にして成人の如きの智あり吳主孫權曾て巨象を贈る太祖其斤重を知らんと欲し之を群下に問ふ能く其理を考へ出す者なし冲の曰く象を太船に置き而して其水痕の至る所を刻し物を稱り以て之れを載せば則ち校量知るべし太祖大に悅び即ち施し行ふ

後漢の蔡琰幼時の才敏

(89) 後漢の蔡琰中郎將邕の女博學にして才辯あり音律に妙あり琰年九

歳邕夜琴を鼓して絃絶ゆ琰の曰く第二絃邕故に一絃を絶ち以て之を問ふ琰の曰く第四絃邕の曰く爾偶中のみ琰の曰く昔し季札風を観國の存亡を知り師曠律を吹き南風の競はざるを識る此れを以て之れを推すゐ何ぞ知らざらん

宋の文彦博幼時の即智

(90) 宋の文彦博幼時群兒と毬を擊つ毬柱穴の中に入る取る事能はず彦博水を以て之に灌く毬浮び出づ

唐の洪鐘幼時の才識

(91) 唐の洪鐘幼にして字を善くす京師に至り即ち肆を設け字を鬻く京師異として神童と爲す憲宗之を聞き召見し聖壽無疆の四字を書せしむ鐘筆を握り之を久ふして動かず上の曰く汝容に識らざる者あるべきか鐘拜して而して答て曰く臣字を識らざるにあらず第此の字地上に於て書すべからざるのみ憲宗驚歎し與ふるに几を以てす一揮乃ち就る上喜ぶ翰林に命ト廩を給し書を讀ましむ

唐の李泌即時の名答

(92) 唐の李泌七歳にして文を能す開元中召されて至る帝方さに張說と奕を觀る說をして之れを試ましむ說乃ち方圓動靜を賦せん事を請ふ泌の曰く願くば其畧を聞かん說因て曰く方は棋局の如く圓は碁子の如く動は碁生の若く靜は碁死の若し泌即ち答て曰く方は義を行ふが若く圓は智を用ふるが若く動は才を騁るが若く靜は意を得るが若し說帝の奇童を得る事を賀す詔して束帛を賜ひ其の家に勅して曰く善く之を視養せよ後ち召されて平章事に拜す

清の宗學詩幼時の逸見

(93) 清の宗學詩年五歳曾て諸兒と庭に戲る一兒月中を指して言て曰く月中何ぞ桂樹あるを得ん舉兒學詩の字の曰く汝月中の桂樹を謂て奇と爲す彼の天地間の樹有る亦當さに奇あらずや

後漢の王粲幼弱にして異才あり

(94) 後漢の蔡邕王粲を見て而して之を奇とす時に邕才學顯著朝廷に貴重せらる常に賓客坐に盈つ一日粲至ると聞き屣を倒にして出迎ふ年幼弱容狀短小一坐盡く驚く邕の曰く此れ王公の孫異才あり吾れ如かざるなり吾が家の書籍文章盡く當さに之れに送るべし燒くの意

晉の王導幼時將相の器と稱せらる

(95) 晉の王導少うして風鑒あり識量清遠あり高士張公見て而して之を奇とし其從兄敦に謂て曰く此の兒容貌志氣將相の器なり始め元帝琅琊王たる時導と相親善導天下已に亂るゝを知り心を傾けて推奉

し潛かに興復の志あり帝も亦雅相器重す導を請ふて安東司馬と爲す軍謀密策知て爲さゞる事なし帝常に謂て曰く卿は吾れの蕭何なり

晉の衞玠五歲にして風神秀發祖父瓘が曰く此兒衆に異なるあり願ふに吾れ年老ひ其成長を見ざるし其舅王濟儁爽にして風姿あり玠を見る毎に輒ち歎ト て曰く珠玉側らに在り我が形の穢はしきを覺ゆと玠が妻の父樂廣海內の重名あり人目して以て婦翁は氷清女壻は玉潤と爲す

晉の衞玠幼時神氣の清秀

(96)

晉の樂廣年八歲夏侯玄之れを見其父に謂て曰く廣神姿朗徹當さに名士と爲るべし專ら學ばしむべし必ず能く卿が門戶を興さん衞瓘見て而して之を奇とし諸子に命して造らしむ曰く此れ人の水鏡之れを見れば瑩然雲霧を披て而して靑天を覩るが如し王衍自ら言ふ人と語れば甚だ簡なり廣を見るに及ては便ち已れの煩を覺ゆと其識者に歎美せらるゝ此くの如し

晉の樂廣八歲の時識者に稱せらる

(97)

晉の謝安四歲に王東海人のことに承けて減せざるべし王導も亦深く之れを器とす是れに由て少きより重名あり後ち秦の符堅大衆入寇す晉軍大に之を擊走す安總統の功を以て大保に進む

晉の謝安四歲にして識者に異とせらる

(98)

晉の謝安年四歲桓彝見て而して嘆ト て曰く此兒風神秀徹後當さに前に出つ

第六　儁秀

前編條欵頗る多きを以て事稍〻少壯に亘るものを分て此編に屬す亦唯〻閲覽に便するのみ

漢の賈誼十八歲にして博士と爲る

(99)

前漢の賈誼年十八能く詩史を誦し文を屬し郡中に稱せらる河南の守吳公之を朝に奏す文帝召して博士と爲す詔令議下る毎に諸老先生未だ言ふ事能はざるに誼盡く之れが對を爲す耆宿以て能と爲す帝之れを悅ぶ超遷して一歲中に太中大夫に至る

晉の裴秀十餘歲にして文を能くす十餘歲の時賓客之れを訪問す

(100)

晉の裴秀少うして學を好み風操あり八歲能く文を屬す叔父徽盛名あり賓客甚だ衆し秀年十餘歲徽に詣る者あれば則ち秀に過る秀が毋賤し嫡母宣氏之を禮せず常に饌を客に進めしむ見る者之れがために起つ毋の曰く微賤の身を以て其敬禮せらるゝ此くの如し當さ

に應さに小兒のための故なるべし宣氏知て遂に之を止む時人之れが語を爲して曰く後進領袖有裴秀仕て司空と爲る秀儒學洽聞心を政事に留む職地官たるを以て禹貢地域の圖を作り之れを奏す秘府に藏むといふ

晉の王義之十三歳の時上客と爲る

(101) 晉の王義之年十三周顗に謁す顗之れを異とす時に牛心の炙を重んず坐客未だ噉はず顗先づ割て之を啗はしむ是に於て始て名を知らる長するに及て辯贍骨鯁を以て稱せらる最も隸書を善くす古今の冠たり仕へて右軍將軍會稽內史に至る

後溪の張堪聖童と稱せらる

(102) 後漢の張堪年十六業を長安に受く志美に行勵し諸儒號して聖童といふ世祖光武位に即き蜀郡の太守に拜し又漁陽の太守と爲る帝嘗て諸郡の計吏を召見し前後守令の能否を問ふ蜀の計掾進て曰く張堪昔し蜀に在り仁以て下を惠み威能く姦を討す前に公孫述破れし時珍寶山積握の物も十世を富ますに足れり去かるに堪職を去るの日折轅車に乘り布被囊のみ帝聞て歎息す

金の吳定翁幼時

(103) 金の吳定翁幼歳儼にして成人の如し寒暑衣冠少しも解らず清修に

嚴肅にして成人の如し

明の劉基讀書の要旨

明の鄭芝龍幼にして大志あり

讀書大意に通じ章句を治めず

して文雅あり嘗て曰く士世に用ひられん事を求むる事あし惟世に媚づる事なからん事を求む人以て名言と爲す

(104) 明の劉基幼より聰明人に絶す凡そ天文兵法性理の諸書目を過れば其要を洞識す

(105) 明の鄭芝龍落魄去て本邦に來る婦を我れに娶り子を生む數歳にして國に歸る兒母と倘ほ我れに在り已に七歳芝龍之を請ひ取る兒風儀整秀倜儻にして大志あり名は森後ち成功と改む讀書頴敏章句を治めず先輩王觀光一見其父に謂て曰く是兒英物子の及ぶ所にあらず年十五弟子員に補せられ二十三陛見す帝之れを奇とし其背を撫して曰く惜らくば一女の卿に配するなし姓朱を賜ひ儀駙馬と稱す常に東向して其母を望む是歳本邦其母を送遣すといふ

(106) 英國有名の政治家あるカンニング一千七百七十年龍動に生る父は愛留蘭の豪族なりしかども故有て家を脱し英國に渡り世途に蹉跌し究迫に陷りぬ是の時カンニングを設けたり爾來益〻究し幾何もな

英のカンニング幼時品行の卓絶

演舌の明了立論の堅確

一千八百二十七年宰相と爲る

く沒しぬ母憂苦艱難の中に彷徨し只管一子の生長をこそ恃みけれ
カンニング其伯父なる某の許に養はれ一學舍に通學し勉强怠らざ
りしかば十二歳にしてエトン校に入り詩文の巧妙なるを以て敎師
朋友に稱贊せらるまた品行の嶷たる大丈夫の如くありければ忽ち
名聲を校中に轟せり當時エトン校に一の討論會あり會の體裁は下
議院に倣ひ規則に依て議長を撰び又議院の敵黨と爲るべき大臣を
擬設し嚴莊に議目を討論し其景況頗る觀るべき者ありカンニング
其演說の明瞭なると立論の堅確なるとに因て名聲會中に高く是れ
ぞ他日眞の議院に出てゝ偉名を轟かす前表とは知られける後ちエ
トン校を去りチッチスフォルド校に入り勤學怠ゆまず其進步も亦從て
迅速にて一日試業の甲賞を得大に覽者の贊歎を得たり斯て此校の
程課を卒業し後ち貴族院に入り此會にて有名なるロード、ジェルバル
ン」カンニングを一見し他日必ず英國の大宰相と爲るべきは此人な
りと明言せり一千八百二十七年果して其言の如く顯赫の位地をこ
そ保ちけれ

北米のウェブスター孩提にして讀書を母に愛く

幼にして詩册を愛し幾多の名詩を暗記す

十四歳にして等輩に超出す

(107)

ダニール、ウェブスター父は仕へて武官と爲り功に依て賞田を得官を
終へ某の地に退耕せり一千七百八十二年ダニール此地に生る幼稚
の頃其下に休ひし樹木其邊に釣せし川流等富貴の日といへども忘
れず老後人生の繁雜を厭ひ暫し世塵を玆に避けしと却說ウェブスタ
ーの母は頗る賢明の婦人なりし氏其膝下に生長し他日世上に發表
したる光輝は皆母の當時兒の心中に蒔かしものなり母は氏の極て
幼少なる時より讀書を授けしと知られたり自ら其未だ聖書を讀む
事能はざりし時分を記せずと云へり母其子の悧發敏慧なるに因り
益〻氣力を得能く之を敎へ他日の俊傑を養成せりウェブスター殊に詩
册を愛し幾多の名詩を暗記し他日歐洲に稀なるほどの文彩を現は
す種子を蒔きたり讀書勉强の閒暇には竿を垂れて魚を釣り銃を放
て鳥を獵るを樂みと爲し繁華の地を厭ひ深林に入て山水の景色を
愛し天然美景の化する所と爲り錦心繡口の才辯を陶成し其演ぶる
所常に山水と美を爭ひために國人の心志を高尙にし習俗を優等の
域に進めたり十四歳の時エキゼスターに至り其地の學校に入り在校

十九歲にして大學を卒業す

幼時の陋弊

一千八百四十年內務卿と爲る

僅に數月にして比肩する者もなき程に進み後ちドクトル、ウードに就て羅甸及び希臘語を學び大に之に通ト遂に大學に入り十九歲にして卒業しそれより法律を研究し千八百零五年遂に裁判所に出るの準許を得其名漸く現はる後ち七年選ばれて議院に出頭し其演說を以て會中に鳴り(編者曰く氏幼時其陋弊を自陳せし言あり云く余在校中何れの課業も隨分進步したれども唯一事の余が能くせざる者あり何ぞや衆人の前に出て演說を爲す是れなり敎師信切に說き勸めたれども如何せん奮發する能はずさり迚私室にては能く之を記臆し度幾ばくなく之れを復誦すれども日限來り衆人會集し我が名を呼び目を余に注ぐ時に至れば余は如何にしても座を立て演說する事能はず敎師或は怒り或は笑ふて勸誘せしかども余終に奮發する事能はざりきと今讀て其演說を以て會中に鳴るといふに至る此れと二人の如く然り則ち知る物養ふて而して化せざるなきを唯學習勤勉に因るのみ)具眼者をして此人や他日必ず合衆國一等の政治家と爲るべしと明言せしめたり後ち又上院に遷り千八百四十年遂に內務卿と爲る

獨のヘルマン十一歲畧〻哲學に通す

學行兼修上帝を敬信す

瑞のハルレル四歲の時聖經の文句を講す

八歲の時二千人の傳を拔萃す

十歲の時單語及び文典を集成す

(108)

ヘルマン、ボエルヘーヴ一千六百六十八年和蘭國某の地に生る父は敎會の牧師たり敬神甚だ厚しヘルマンをして亦た其の道を繼がしめんと欲すヘルマン能く父の志を體し十一歲畧〻哲學に通す十四歲專ら敎法を修めんと欲す是れより先き瘍を患ふ醫藥効なし自ら一方を案出し愈る事を得たり此に由て專ら醫學を攻究し二十歲の比は大學に於て某々等の方術を駁論し能辯博識を以て大に名聲を發すために黃金の賞牌を受く後大學校醫學大講義に擧げらる名益〻顯はる幾ばくもなくして植物博士を兼任す亦敎法に熱心なるを以て學行兼修上帝を敬神す誹る者は反て之れを慣み惡む者は反て之れを愛す又た種々の醫書を著し醫術改良の端漸く開け遂に名を海外に轟かすといふ

(109)

アルベルト、ハルレル一千七百八年瑞士國某の地に生る幼にして異才あり四歲の時祭日に會し父母親戚の前に坐し聖經の文句を講し八歲の時人名字書の中より二千人の傳を拔萃し十歲自用に供せんがために希白(ヘブライ)及び希臘(ギリシヤ)の單語を撰集しまた其の文典を編成し十五

十五歲にして四千餘首の詩を作る
英王の請求に因て貴族に列す

歲四千餘首の詩を作り奇聞を陳述せりハルレル十四歲遊學し業成り國に歸り大に用ひられ其名外國に聞ゆ當時國王英王の請求に因りハルレルをバーロン貴族の號に列するが如き是れ最も榮譽といふ

ワシントン幼時航海を好む
容止端嚴心志沈重
十九歲民兵將官と爲る
二十三歲民兵總大將と爲る

(110) ヂヨルヂ、ワシントン一千七百三十二年北亞米利加某の地に生る曾祖父某英國より此に移住すヂヨルヂ幼時僅かに英語の讀方を受け算術を習ふ幼きより甚だ航海を好み一たび英國の見習仕官と爲る己にして母の意に從ひ之れを罷む後ち檢地の業に從事す其勉强熟煉の著しき大に人に稱賛せらる人と爲り容止端嚴心志沈重其の偉人たる一目して知るべし十九歲某の民兵將官に舉けらる英佛某の地を相爭ふに當り英の使節と爲り佛軍の本營に赴く城堡の形勢兵の多寡强弱地形の險夷山川の要害竊かに之を探識し任を卒へ歸る和議破るゝに及て三百人の隊長に任し軍に赴く頻りに勳功あり後ち職を辭し退て農事に就かんと欲す佛兵復た英領を侵す官氏に命ト某の民兵總大將と爲す擊て之を退く時に齡二十有三といふ

宋の司馬光幼時の機智
楚の孫叔敖兒時の仁心
高倉帝幼時の寬容

第七 心術

(111) 宋の司馬温公幼時群兒と戲る一兒水甕の中に墮つ群兒駭走公忽ち石もて甕を破る兒死せざるを得たり

(112) 楚の孫叔敖嬰兒たる時出遊して還り憂て而して食せす母其故を問ふ泣て對て曰く今日兒兩頭の蛇を見る聞く兩頭の蛇を見る者は死すと恐くは死を去る事日あけん母の曰く今蛇安くに在る曰く他人の殃之れを見ん事を恐れ已に之れを埋む母の曰く憂ふる事勿かれ汝死なず吾れ之れを聞く隱德ある者は天報ゆるに幸を以てすと後ち令尹と爲るに及て未だ治めずして國人之を信ず

(113) 高倉天皇賢明仁孝慍り色に形はれず年甫て十歲庭に楓樹あり帝特に之を愛し藤原信成をして監護せしむ一日仕丁枝を折り燒て酒を煖む信成驚懼具さに其狀を奏す帝從容唐詩を誦して曰く林間煖酒燒紅葉仕丁風流可賞哉帝政を爲す寬惠時に平淸盛跋扈し皇威凌遲す憤怨病を成し遂に崩ず年二十三朝野悲惋嘆惜せざるはなし

宋の富弼少時の雅量

(114) 宋の富弼少時人罵る者あり聞かざるものゝ如し人の曰く汝を罵るを弼の曰く恐くば他人を罵るあらん其人又曰く汝の姓名を呼て罵るを豈他人あらんや弼の曰く天下の廣き同姓名の者なからんや其人之を聞き大に慚づ宰相と爲るに及で布衣の謁見といへども必ず禮を以てせり

編者曰く宋の呂蒙正參政たり朝士あり之を指して曰く此子も亦た參政か蒙正佯て聞かざるが如し同列其姓名を詰らんと欲す蒙正之を止めて曰く若し一たび姓名を知らば則ち終身忘れず知る事なからんには如かざるありと此れと同一意向何ぞ其氣宇の快濶あるや

宋の呂公著幼時の沈定

(115) 宋の呂許公子數人あり而して其の孰れか國に當つべきを定めず乃ち其齊しく集るを俟ち婢をして一筐を以て玉甌に茶を盛り齊しく之れに餉らしむ既に還る詐て地に跌き甌皆碎く諸子悚然自ら之を罵る者あり馳せて父母に語る者あり獨り公著の希哲の父なり所凝然として動かず許公乃ち曰く此子異に宰相の器なり後ち果して然り

北條泰時幼時人の過ちを掩ふ

編者曰く後漢の劉寛性温恕夫人其の將さに朝參せんとし裝嚴已に訖るを伺ひ婢をして肉羹を奉ト翻して朝服を汙さしむ婢遽て之を收む寛神色異あらず乃ち徐かに言て曰く羹汝が手を爛らすなからんやと性度の美以て相發養すべし

(116) 北條泰時幼名を金剛といふ嘗て徒歩して出遊し多賀重行といふ者に出逢ひ重行馬を下らざりし頼朝之を聞き大に怒り重行を召して禮は老少を別つべき事にあらず金剛の如きは汝儕の輩にあらざるなりと責めたしなみたりしに重行詐てさる事は無しと答ふ頼朝愈怒り泰時に問ひ質せしに泰時重行の罪を得ん事を恐れ重行の申せし如しと答へければ頼朝其の能く人の過ちを掩ふ事を嘉みし劒を賜ひ褒奬せしと時に泰時十三歳なりし

徳川家康幼にして識見衆に超ゆ

(117) 徳川家康幼にして尾張に質たりし時百舌を獻する者あり卻けて受けず左右其故を問ふ曰く吾れ聞く主將は小慧の者を取らずとまた其の十歳の時出てゝ阿倍河原に遊び兒童の石戰を觀る一群百五十

人一群之れに倍す觀る者爭て其衆ある者に就く家康負はれて僕の背に在り命ドて其寡なる者に就かしむ僕恠て其故を問ふ家康の曰く衆なる者は自ら其衆を恃み寡なる者は自ら其寡あるを知る寡なる者勝たん果して其言の如し今川義元之を聞て曰く所謂將門將を出すもの

毛利元就幼時の識量

(118)

毛利元就髫齔嚴島の祠に詣ず從者に問て曰く汝輩何を祈る曰く郎君安藝に主たらん事を祈る曰く汝盍ぞ吾が天下に主たるを祈らざる夫れ天下に主たる事を願ふ者能く一方に主たり一方に主たる事を願ふ者能く一國に主たり今一國に主たらん事を願ふ成る所知るべきのみ聞く者歎異す

松平信綱幼時の操守

(119)

松平信綱幼にして德川將軍家光其の世子たる時之れが侍堅たり家光嘗て屋上の乳雀を觀近臣に命ド往て之れを捕へしむ屋將軍の燕居室に係るを以て衆往く事を難る乃ち信綱を推して曰く汝年幼く體輕し宜しく往くべし信綱勉强命に應ド夜潛かに屋に縁り之を索め足を失して庭中に墜つ謖然として聲あり將軍刀を提け夫人燭を執て出て信綱を見其の來る由を問ふ對て曰く臣雀兒を觀竊かに來り捕ふるあり將軍の曰く否必ず主使の者あらん究詰する事再四にして而して告けず將軍怒り信綱を巨囊の中に納れ其口を緘ぢ之を柱に懸く曰く汝實を首せずんば出る事を許さず信綱囊中より之を辨ず旦に徹す旦日將軍出て〻朝を視る夫人其の志を憫み其飢を慮り囊口を眡き餕を以て之れに食はしめ復た其口を緘る初の如し日中將軍入りまた之を詰る終に辭を改めず夫人固く請て之れを縱るす將軍目送し夫人に謂て曰く孺子能く斯くの如し後ち我が兒を羽翼せん果して其言の如し

森蘭丸幼時の謹信

(120)

織田信長の近臣森蘭丸謹信にして聰慧信長嘗て其才を檢せんと欲し命して前室の紙障を闔さゞしむ蘭丸諾して而して起ち至れば則ち障已に闔づ乃ち緩く開て而して緊しく之を闔ぢ然る後ち反命す信長の曰く障果して開きゐしや曰く已に闔ざしありし然らば則ち其憂然として聲ありしものは何ぞや蘭丸謹て對て曰く君臣に命ド紙障を闔ざゝしむ若し其既に闔ぢありしを以て而して徒らに歸る

君の命廢す故に臣謹て開き而して之れを闔づまた嘗て信長の刀を奉し側に在り刀鞘黒漆款紋數十條あり蘭丸潛かに其數を料記す信長覩て之れを知る後ち數日近臣を集め其刀を撫し之に謂て曰く能く鞘上の款紋を暗射する者あらば乃ち此刀を與へん衆爭ふて之を射る中つる能はず蘭丸獨り默して言はず信長之に謂て曰く汝何ぞ獨り言はざる蘭丸謹み對て曰く臣嘗て其數を料起す信長其誠慤を嘉みし賜ふに其刀を以てす

酒井金三郎幼時の忠實

(121)

關東の舊族千葉氏の臣に原姓なるものあり而して酒井は又其臣隷あり千葉氏亡び其遺臣德川氏に來り仕ふる者往往之れあり原吉丸酒井金三郎の如きも亦其遺臣を以て共に家康に扈從たり一日家康俄かに起て庭に出づ吉丸刀を奉ト履を着るに暇あらず徒跣之れに從ふ時に天暑く砌熱す金三走り往き之れに履を授く儕輩相訴して曰く同僚親しといへども豈執履の役を爲すに堪へん渠れ之を稠人の中に行ふ何ぞ恥を知らざるの甚しき物論騷然たり有司以て訴ふ家康金三を召して之を詰る金三答て曰く吉丸臣が舊主の子臣其炎天徒跣を視るに忍びず故に履を取て之れに授くと家康歎ト て曰く金三年少といへども舊主の義を忘れず其情誠に嘉みすべし因て祿若干を增す

周(南北朝)の竇毅の女幼時の貞烈

(122)

竇毅、周に在り上柱國たり女あり方さに數歲列女傳を讀み一過して忘れず隋、周の禪りを受るを聞き自ら床下に投ト て曰く恨らくば我れ男子にあらずして眞家の難を救ふ事能はず毅口を掩て曰く妄言する事勿れ吾が族赤せられん(一族皆刑せらるゝをいふ)毅嘗て夫人に謂て曰く此女奇相あり妄りに人に與ふべからず二孔雀を屏間に畫き婚を請ふ者をして二矢を射目に中てしむ李淵射て各一目に中つ遂ゐ以て之れに歸す淵、唐の高祖と爲り竇氏后と爲る

唐の竇氏の二女幼時の貞烈

(123)

唐の奉天縣竇氏の二女草野に生長し幼にして志操あり永泰中に群盜數千人其村落を剽畧す二女皆容色あり長なる者十九幼なる者十六共に巖穴の間に匿る盜之を曳出し駈迫して以て前む壑谷深き數百尺なるに臨み其姉先て曰く吾れ寧死に就くも義辱しめを受けず ど即ち崖下に投ト て而して死す盜方さに驚愕其妹も亦之に繼き自

ら投ず京兆尹其貞烈を嘉みし之を奏す詔して其門閭に旌表し永く其家の丁役を除く（しるしあらはす）

(124)

節女名は阿正父を七兵といふ長門赤間村の人あり農を業とし又酒を釀す家頗る富む二たび妻を娶る節女は其後妻の出あり後妻も亦先づ亡す七兵已に老し家を外甥七左に讓る其病篤きに及び族人を集め之に囑して曰く吾が命旦夕にあり而して丈夫の子あし唯〻二女あり以て公等を煩さん願くば嘉右を養ひ妻すに長女を以てせん次女に至ては其長するを待ち之を長二に妻し以て宗家の緒を承けしめん嘉右は其後妻の弟あり長二は七左の子なり親族相計り其言の如く長女を嘉右に配し之をして阿正を子養せしむ阿正天質穢粹（こざれい）嘉右夫妻に事ふる甚だ謹む嘉右性無賴事を事とせず日々馬醫萬助（隱居）あるを者と酒を飲み沈湎（はまりこむ）義父與ふる所の田產を典し（賣入）幾と盡く親族交〻之を規（たゞ）す聽かず是の時阿正既に長ト長二も亦弱冠長二人と爲り質直勤格而して連りに災患に遇ひ稍〻產を落す是を以て因循（其儘）未だ婚を成さゞるあり赤間の隣邑を勝浦村といふ其村長半五家甚だ富む其子の

節女お正の苦心

ために婦を擇ぶ阿正の才姿あるを聞き之れを獲んと欲す萬助に告るに其意を以てす萬助其の已れに利ある事を知り輒ち諾し之を嘉右に語る嘉右大に喜び親族に謀らずして而して之と許さんと欲す親屬之を聞き其舊約に背き新利を謀る事を讒む嘉右之を患ひ萬助に語るに故を以てす萬助畫策（仕向を付る）して曰く本村の長善次、半五と親善託するに媒介を以てし公然來り請はしむ奴輩何ぞ能く沮まん嘉右大に善び萬助をして潛かに往て意を授けしむ善次許諾し僧に來り議を決す乃ち阿正を呼び之を告げ說くに利害を以てす阿正默然答へず良久うして曰く諸君妾のために謀る妾（いかで）か聽かざらん然れども阿爺沒するに臨み妾を撫して而して之れを長二に許す慈心屬する所萬背くべからず百事唯〻命のまゝ獨り此事從ふ能はず涙言と俱に下る萬助等大に怒て曰く吾輩說く所唯〻卿のためのみあらず義父に利ある事を計り施て吾輩に至るまで與かりて榮耀あり此洪福を舍てゝ而して落魂（前に出づ）の長二を慕ふ曷ぞ傾倒（無分別）の甚しき嘉右も亦罵て曰く汝此婚を肯せず意ふに己に密かに長二と通するあらん吾れ必ず汝

阿正自殺して貞節を全ふす

二通の遺書

等二人を逐出さん阿正顔を低れて言はず萬助の曰く事已に此に至る何ぞ長言を用ひん速かに日を卜し幣を納るゝに如かず善次暦を閲す曰く某の日吉是に於て歡飲夜を徹す阿正隅に向ひ飲泣するのみ是れより梳粧皆廢す家人其變あるを慮り更〻之れを守る既にして阿正忽ち洒然涙を收む稍〻髮を理め面を瀆す家人其志を改めしかと意ひ防護寢解く阿正間に乘卜沐浴裝束し屋後の炭廠に入り厨刀を以て咽を貫き兩手膝に據り伏して而して死す時に年十八傍らに遺書二通あり其一は義父母に遺る曰く「兒幼にして鞠嬢を喪ひ乃ち覆育の恩を蒙る曾海山のみあらず此般の婚事已に父母に利また諸親に利あり宜しく速かに命を奉すべし獨り初め二郎に許嫁するを奈にせん近ごろ其生業漸く落るを聞く是の時に乘卜變卜て而して他に適き獨り富貴を享く豈人情の忍ぶ所あらんや且つ是れ妾遺言に違て而して二郎に背くあり妾をして違はず背かざらしめば則義父母に不孝妾身此の難に遭ふ唯一死あり奉事終へず多罪萬恕」其一長二に遺る曰く「妾が身君に許す更に言を須ず而して近ごろ勝浦に適く事を勸るに遭ひ幣を納るゝ日あり妾悲愴に堪へず抑此婚や諸人勸説復た一人の君に適くを贊する者なし妾是に於て轉君の痛むべきを覺ゆるなり饒ひ妾をして不義の婚を爲し身錦繡を披口肥甘に飽かしむも獨り何の面目ありて人間に視息せんや義父謂ふ妾君と已に慇懃を通ずと云かれども其の此れあき君の知る所なり特に許嫁の重きを思ひ又近者に辭あらん事を欲す彼れを思ひ此れを念ふ萬感心を纏ふ自ら殘ふ所以實くば憐察せられよ」諸人愕眙而して其の後禍を懼れ狂疾を以て聞す事寢で問はざる事を得實に享和元年十一月あり後ち十八年本藩儒臣竹田某學館の課題を命ずるに節女詞を以てし且つ自ら長韻を賦し悉く其事を叙す藩侯詩を閲みし心之れを異とし因て密かに中外に詢ふ始て其實を得吏を遣り廉問遂に兩村長の職を奪ひ當時郡宰以下を追咎し黜罰差あり節女の家に白金を賜ひ以て存恤せしめ永く之れを旌すと云ふ

國守節女を追賞す

後漢の陳蕃十五歳にして大志を抱く

(125)

後漢の陳蕃年十五常に一室に閒處し庭宇蕪穢す父の友薛勤來て之を候し蕃に謂て曰く孺子何ぞ洒掃して以て賓客を待たざる蕃の曰

く大丈夫世に處る當さに天下を掃除すべし安んぞ一室を事とせん勤其の清世の志あるを知り甚だ之を奇とす

宋の劉愚の妻幼時の志尚

(126) 宋の劉愚幼にして警敏學を力む妻徐氏家に在る時其の母將さに以て姑の子の富者に與へんと欲す徐泣て曰く富人の妻たるを願はず遂に愚に歸す一に機杼を事とす愚嘗て白金を懷にし歸る徐怒て曰く我れ子を以て賢と爲す而して是くの如し愚書を出し以て其束脩なるを示す乃ち止む

魏の常林少うして單貧手力にあらざるよりは之を人に取らず性學を好む經を帶て耕鋤す其妻之れに餉す田野に在るといへども相敬する事賓の如し

(127) 魏の常林少うして單貧手力にあらざるよりは之を人に取らず性學を好む經を帶て耕鋤す其妻之れに餉す田野に在るといへども相敬する事賓の如し

晉の魏舒少うして孤なり外家寗氏のために養はる寗氏宅を起す相者の云く當さに貴甥を出すべし外祖母謂へらく盛氏の甥小にして慧なるを以て之れに應ずと舒の曰く當さに外氏のために此の宅相を成すべし舒姿望秀偉にして遒鍾質朴鄉親のために重せられず舒常人の節を修めず亦奇激の事を爲さず毎に才を容れ物を長せんと

(128) 晉の魏舒少うして孤なり外家寗氏のために養はる寗氏宅を起す相者の云く當さに貴甥を出すべし外祖母謂へらく盛氏の甥小にして慧なるを以て之れに應ずと舒の曰く當さに外氏のために此の宅相を成すべし舒姿望秀偉にして遒鍾質朴鄉親のために重せられず舒常人の節を修めず亦奇激の事を爲さず毎に才を容れ物を長せんと

作法　取つくろばね　なみはづれ　見かけ　高大　人才　愛し　人物

英のウヰルベルフチース体質虚弱にして而して精神活潑

孝を以て親に事へ愛を以て姉妹を待す

少年の交際家

欲し終に人の短を顯はさず仕へて尚書郎に至る時に郎官を沙汰し非才の者を罷めんと欲す舒が曰く吾れ即ち其人なりと被を襆て而して出づ後ち相國參軍に轉ず文帝深く之を器重す朝會より罷む毎に之を目送して曰く魏舒堂々人の領袖あり

(129) ウヰルベルフチースは英國の舊族にして昔日莫大の財産を有し頗る富有の家なりしも第十七世期の頃より漸く家産を落し千七百五十九年に至てウヰルベルフチース生誕せり生れて虚弱常に醫藥を絶ざりしかも其精神は身體に似氣あく活潑强壯にして且つ慈悲心深く孝を以て親に事へ愛以て姉妹に交りし七歳にして或る學校に入り日〻惰あく能く諸課を修め殊に辯舌の爽快ある事校中に比類あかりしかくてある事二年其父身まがりければ伯父の許に移て養護を受け後ち伴はれて龍動府に赴き一の小學校に入り羅、希、佛語及び算術の初歩を學べり後ち或る大學校に入りて修業し學力大に進み敎師の鐘愛をうけたり氏曾に辯舌の爽快あるのみあらず頓智機轉を備へたる少年の交際家なるゆへ諸人皆之を親み常に朋友親戚に招待

仁慈の性質を具へ殘忍の所爲を嫌ふ

十四歳にして賣奴の非理を辨論す

せられたり且つ氏は生來仁慈の性質を稟けしかば總て殘忍刻薄の所業を嫌らひ彼の奴隷商賣の天理に逆ひ人道に背きたる事を憤り文明開化の人にして斯る非道の所業を爲すとは何事ぞや是れ素より廢せざるべからずとて則ち一文を新聞社に寄せ其非理無道の事たるを辨論せり此時僅か十四歳ありし氏は一個の快活男子ありければ詩文詞章の間に汲々たるが如きは其性の潔しとせざる所かと思はるれどさはあらくて能く強めて文辭を修め彼の奴隷論の如きは其主旨の觀るべきのみならず其文章も亦頗る巧妙なりしと云ふ十七歳にしてカンブリッヂの大學校に入り彼の後ち英國の宰相と爲りたる有名あるピット此頃在校しければ深く交りを結び後ち共に議院の席を占むる事を得たり氏が建議の大事件も初めの程は俗論盛にして容易に行はるべきにあらざりしかど百折不撓終始以て己れが任と爲し千七百八十九年に至り下院に於て奴隷商賣を廢すべき議を發し後ち十八年と經て漸く諸人の贊成を得之を布告するの歡に遇ひたり氏續て啻に商賣のみならず奴隷も亦廢せざるべからざ

百折不撓終に其持論を達す

臨終に際して解奴の令を得

るを發議し眞神の貴く所是れも亦奏功し氏病床にあり將さに絶えなんとする時恰も奴隷解改令の認可を得たるを聞き欣然眼を開き感喜の語を遺して遂に遠逝せしとぞ

編者曰く天地と化育を同ふし所謂三才並べ稱して而して慚づる無き者其れ斯くの如き輩の人か

先賢幼時言行錄

第八　學問

法王アドリヤン幼時の苦學

(130) 羅馬敎皇アドリヤン第六世至貧より起る幼時夜課を修むるや燈を得るに由なし道路又は寺院の常夜燈に就き以て明を取り勤學せしといふ

博士アダム遊學時代の艱苦

(131) エデンボロ府高等學校の校長たる博士アダム身を下賤より起す其幼時エデンボロ府に遊學するや實に極貧たり一陋屋に止宿し其食たる午飯の外麥粥を用ふ其午飯と雖も自ら往て一塊の麵麭を買ひ晴日は則ち公園に往き途中之を食ひ雨日は則ち歸宿し階梯を登りつゝ之を食ひ以て薪炭の費を省き又天寒ければ則ち故さらに運動し血温を起し以て煖を取る夜學は則ち朋友或は他人の家に於て之を爲し然り而して年二十に至り施藥院長と爲るといふ

二十歲にして施藥院長と爲る

瑞のリネア性堅

(132) チャールス、リチア一千七百七年瑞典國某の地に生る性堅忍不拔才秀て學を勵む幼にして本草學に志す其校に在るや餘暇あれば則ち必ず山野に出で草木の性質を研究す父極めて貧して學資を給する能はず遂に書籍衣食に乏しく甚しきは則ち一全靴なく其野に出る木皮を敗靴に纏ふに至りしといふ而して學益〻奮勵遂に大學生と爲る後ち大學藥劑博士に累進し北星の勳位に叙せられ貴族に列す

忍不拔才秀で學を勵む

家貧して一全靴無きに至る

藥劑博士に累進し貴族に列す

英のウヰルリヤム幼にして業を勵み算術に長す

(133) ウヰルリヤム、ギッフホルド一千七百五十六年英國某の地に生る父は靴師たり幼にして父母を喪ふ已む事を得ず農家の奴僕と爲る閒を偷み讀書習字を修む主人之を憐み某の學校に入らしむウヰルリヤム衆に拔て業を勉む就中算術に秀づ行々敎官たらん事を熱望すしかれども主人强ひて製靴業に就かしむ固より其志にあらざるを以て暇あれば則ち每に密に勉學す其言に曰く余一錢の金なく又一友の余を助る者なし故に片紙寸墨の余に於る恰も金冠玉笏に異あるなき余革を打延ばし之を滑にし以て紙に代へ靴針を鈍くし以て筆に代へ算術を學ぶ事を得たりとウヰルリヤム赤貧洗ふが如しといへども志益〻堅く種々の方便を以て勤修自奮ひ業日々に進む其詩名の

赤貧洗ふが如にして而して志益〻堅し

英のヂーンス幼にして學を好む

書を讀み動もすれば睡眠を忘る

汎く衆藝に通ず

學識豐富人物も亦衆に度越す

如き一時に喧噪す後ち文學を以て某の新聞編輯長と爲り世の喝采を博すといふ

(134) ウヰルリヤム、ヂーンス一千七百四十六年英國ロンドン府に生る三歲にして父を喪ふ敎育一に之を母に受くヂーンス幼にして學を好む母益〻之を贊美奬勵すヂーンス問ふ事ある每に母之に告て曰く須く書を讀むべし汝必ず之を知るに至らんヂーンス益〻勤學讀力日に進む七歲の時某の學校に入り後ちオックスフォルド大學に入る勉學衆に超ゆ一敎師之を評して曰く彼のヂーンスある者假令裸體にして之をサリスボリーの曠原に放ち一人の往來する者あきも彼れ必ず英名富豪の道路に達せんと其書を讀むや動もすれば則ち睡眠を忘る亦其眠を惡み茶若くば茄非を飲み通宵勉學す且つ廣く外國語を學び羅甸希臘の語に至ては之に熟達すまた暇あれば則ち馬術劍擲を學び傍ら歌舞音樂其他の遊戲も亦之れを修習す之れを要するに諸國の言語に通ト學識豐富人物も亦衆に度越すといふ

(135) 原雙桂名は瑜京師の人生れて而して凝雋群兒に異あれり十歲にして章句を伊藤東涯に受く漸く長ト學を嗜む事飢渴の如く口誦し手錄し晝夜廢せず父母心之を奇とし而して其或は疾を得ん事を恐れ云へらく帷を下し憤りを發す成人の事兒今童年惟〻學問闇斷おくして可なり雙桂答て曰く蚤起文字を尋思す心下の爽を覺ゆ稍〻晏起すれば頭岑々として心裏甚だ安からず東涯其の篤學を稱して後進の領袖と爲せり

原雙桂幼時學を嗜む事飲食の如し

清の顧棟高幼時の嗜學

宋の范純仁少時の勤學

宋の司馬光幼時の精勉

(136) 清の顧棟高少うして春秋を治め篤く左氏を好み晝夜研究す恐憶を懷く事あれば輙ち家人左傳一卷を以て其几上に置く怡然之を誦し復た他事を問はず

(137) 宋の范純仁少うして晝夜業を肆らふ燈と帳中に置き中夜寢ねず後ち貴し夫人其帳を収む項墨色の如じ以て子孫に示して曰く爾が父少時學を勤む燈烟の迹あり

(138) 宋の司馬光幼時記問人に若かざるを患ひ群居講習し衆兄弟誦を成し已に遊息する時に當り獨り帷を下し之を反習し能く背誦するに及で乃ち止む力を用ふる多き者は功を收むる事遠し其精誦する所

宋の呂希哲十歳にして寒暑にも終日侍立す

(139) 乃ち終身忘れざるあり

宋の呂希哲、公著の長子なり公著家に在る簡重寡默事物を以て心に經ず而して夫人性嚴にして法度あり甚だ希哲を愛すといへども然れども之をして事々規矩を循ひ踏ましむ甫て十歳にして祁寒暑雨にも侍立して日を終へ之れに坐を命せざれば敢て坐せず日々に必ず冠帶して以て長者に見ゆ平居甚だ熱しといへども父母長者の側らに在ては則ち衣服巾襪を去る事を得ず唯謹めり行步出入茶肆酒肆等に入る事なし市井里巷の語鄙猥の音未だ嘗て耳に觸れず不正の書非禮の色未だ嘗て目に接へず是の時焦千之といふ人歐陽修の許に客たり人と爲り嚴毅方正なり公著之を請致し諸子を敎へしむ諸子少しく過差あれば焦先生端坐召して共に相對し終日竟夕之れと語らず諸子畏伏止まず先生辭色を降す時に希哲方さに十余歳内は則ち其父母敎訓此くの如く是れ嚴外は則ち焦先生化導此くの如く之れ篤し故に其德器成就して大に衆人に異なれり嘗て自ら言く内に賢父兄あく外に嚴師友無くして而して能く成る者は少し

林羅山八歳にして太平記を背誦す

(140) 右勸學

甲斐の德本林羅山の父に過ぎり太平記を讀めり羅山時に年八歳一聞して之を記し即ち背誦するもの數十張後ち書を東山の僧舍に讀む五行俱に下り目を過れば皆臆す人目して囊耳といふ言ふは入て而して漏れざるなり

藤原芳子古今集を諳誦す

(141) 藤原芳子女御と爲る初め家に在る琴書を學び古今集を諳誦す帝親ら試るに碁子を以て籌と爲す終に一の錯誤なし

後漢の應奉の强記

(142) 後漢の應奉少して聰明童兒たりしより長ずるに及ぶまで凡そ經履する所暗記せざるはなし書を讀むに五行並び下る郡の決曹史部と爲り四十二縣を行り囚徒數百人を錄す還るに及て太守之を問ふ奉口づから罪繫の姓名坐狀の輕重を說に遺脫なし時人之を奇とす官司隷校尉に至る

英のジョンソン奇異の記性

(143) 英國文壇の泰斗と仰がれたるドクトル、ジョンソン天資强記一たび聞けば決して忘れざるの異性ありし一日母神拜書中の一章を指し之れを暗記すべしと云ひ置き直ちに二階に昇るや否やジョンソン

大江匡房四歳にして書を讀む

八歳にして史漢に通ず

十一歳にして詩を作る

春澄善繩幼時手卷をすてず

後に續て來りければ何用ぞやと問ふに暗誦して候とて一字も誤らず繰返へしける故母大に感稱したりしとぞ又ションションの一友嘗てションションに向ひ或る書の十八節を暗誦せしにションション之れを聞き少しく歌みたる後ち之を復誦し僅に一語を差へしが其實は故さらに原文を改め善くしたりと云へりしとぞ（調賦載する所と參看すべし）

右彊記

(144) 大江匡房穎悟絶倫四歳書を讀む八歳史漢に通ず十一歳詩を作る文辭其祖父に及ばずといへども然れども才學優長古今に博識に至ては（止）江家のみならず諸氏蓋し及ぶ者無し最も意を典章（禮式）に留む傍ら兵法に通ず薨ずるに及て中納言宗忠歎惜して曰く斯人八葉の儒家三世の侍讀朝の樞要文の燈燭なり（目じるし）

(145) 春澄善繩幼にして明慧骨格非凡弱冠學に入る手卷を釋てず博洽多通藻思に妙あり性周愼謹朴にして已れの長を以て人に加へず初め（元じめ）文章博士と爲る時に諸博士皆更に以て相輕んず善繩謙退門徒を謝遣し終に謗議を爲さず（詩才の事）（跨らぬ）

大江時棟幼時行く〳〵書を讀む

晉の賀循幼時の禮讓

後漢の賈逵弱冠にして教授す

後漢の荀爽十二歳にして春秋論時に通す

宋の張子韶八歳

(146) 大江時棟文章博士匡衡の義子なり何人の子たるを詳にせず幼にして穎敏重瞳子あり攝政道長路にして一童子行〳〵且つ書を讀むを見る儀相凡ならず心之れ奇とし携て而して家に歸り匡衡をして之を養はしむ是れを時棟と爲す才學日々に進み博く經史に通ず仕へて國守に至る

(147) 晉の賀循童齔（八歳なを齔よりいふ）より不群言行進止必ず禮讓を以てす仕へて太常に拜す朝廷疑義あれば皆之れを諮ふ循輙ち禮經に依て對ふ世の儒宗と爲る

(148) 後漢の賈逵弱冠にして能く左氏傳及び五經の本文を誦し大夏侯の尚書を以て教授す五家（尹更始、劉向、周慶、丁姓、王彥）穀梁の說に兼通す

(149) 後漢の荀爽幼より學を好み十二にして春秋論語に通ず太尉杜喬見て而して之を稱して曰く人の師たるべし爽思ひを經書に耽らし慶弔にも行かず徵命にも應せず潁川（爽の鄉）の之れが語を爲して曰く荀氏八龍（兄弟八人並に聲譽あり時人之を八龍といふ）慈明（爽が字）無雙と

(150) 宋の張子韶八歳にして六經を默誦し大旨に通ず十四歳郡庠（村校）に遊ぶ

にして六經を默誦す

十四歲にして師尊せらる

明の薛瑄少時經學を專修す

閤を閉ぢ日を終ふ比舍生穴隙して之を視れば則ち膝を斂め危坐書編に對し服膺懈らす神明と伍するが如し大に相敬服して而して之を師尊す（そろへ　吃度さして　取守る事）

(151)

明の薛瑄幼にして穎悟年十三詩賦を作る監司之を奇とす稍〻長じ周、程、張、朱の書を講し嘆して曰く道學の正脈なり遂に其作る所の詩賦を焚き心を此に專らにし寢食を忘るゝに至る進士に登り累官して大學士に至る瑄學を爲す實踐を貴ぶ一言一動禮に違ふ事あれば便ち心自ら安んぜず

小田村鄜山十二歲にして經を談じ詩を賦す

十七歲の時孔廟の祭司と爲る

(152)

小田村鄜山名は公望周防の人幼にして明秀善く詩を作る世神童と稱す郡宰某一見之を奇とし之を藩侯に薦む十二歲初て萩に往き山縣周南の門に遊ぶ貴戚巨室延て上客と爲す經を談ず詩を賦し名城中に振ふ藩侯新に學を興し鄜山を擢で孔廟を司らしむ時に年十七後ち江戸に如き物徂徠に從て學ぶ服部南郭平金華諸名士と周旋し人妙齡（立廻り）（幼なり）雋拔と擧稱せり徂徠も亦其文を賞して曰く雖虎の才ありと業を卒へて還り學館都講に任せらる元文四年隊騎に列し講師と爲る（文才の秀美なる事）

河野恕齋四五歲にして習字及び讀書を能くす

十歲詩を能くす

十六歲文を能くす

學術大に弘まり弟子益〻進み老職庶士より以て醫生細流に至るまで皆從遊業を問へり鄜山人と爲り溫良協和能く衆と容る人のために謀る忠實にして其事を處する能く機會を得たり故を以て人々大に之を忻慕す而して心を操る直諒（まこと）にして權門勢家といへども未だ嘗て意を曲げ容らるゝ事を求めず若し禮待稍〻薄きことあれば則ち去て而して顧みず故に一時其風操を仰ぎしといふ

(153)

河野恕齋名は子龍生れて而して穎悟四五歲にして能く書し能く誦し十歲詩を能くす蓮池侯其神童なるを聞き客舍に召見し書及び詩を試ひ命に應ト立處に成る侯悅び厚く之に賞賜せり稍〻長ト其學大に進み經史百家より以て稗官（野史）小說に至る迄該覽せざるはなし尤文章に長ト筆を下せば頃刻に數百千言に至る名京師を動かす肥後の藪孤山京師に遊び恕齋を見る時に年十六其文章を觀驚て曰く世豈復た斯人あらんや異日海內の文宗たる者子にあらずして誰れぞ遂に相親善す恕齋深沈多智大志あり賈誼陸贄の人と爲りを慕ふ嘗て曰く君子學を爲す苟も之を事業に措く能はずんば則ち全德にあらず

唐の李白十歳にして詩書に通ず

唐の李賀七歳にして吟詠に耽る

魏の曹植十余歳にして數十万言を誦讀す

晉の潘岳夏侯湛と小時共に文オを以て秀出す

橘廣相九歳にして詩を賦す

藤原敦光幼にして學を好む

藤原衛七歳にして登第す

紫式部幼時父のために歎稱せらる

第九　詩賦上

(154) 唐の李白十歳にして詩書に通ず賀知章其文を見歎ト て曰く子は謫仙人なり（謫せられて地に在る仙人とのの意なり）

(155) 唐の李賀七歳にして辭章を能くし苦吟自ら耽る且つ毎に出るに騎り小奚奴一の古錦囊を背にし後へに隨ふ句を得れば則ち其中に投ず

(156) 魏の陳思王曹植年十歳余詩論及び辭賦數十萬言を誦讀し善く文を屬す太祖（植の父操）嘗て其文を視て曰く汝人を倩（やとい）ふか植の曰く言出て丶論と爲り筆を下せば章を成す奈何ぞ人を倩はん時に銅雀臺新たに成る太祖悉く諸子を將（ひきい）て臺に登り各〻をして賦を爲らしむ植筆を援り立どころに成る文字觀るべし太祖甚だ之を異とす進見する毎に難問す聲に應ト て對ふ特に寵異せらる文帝（植の兄）の位に即くに及て陳思王に累封す

(157) 晉の潘岳少うして才穎を以て稱せらる鄉邑號して奇童と爲す辭藻絶麗秀才に舉げられ名世に冠たり夏侯湛亦幼にして盛才あり文章宏富善く新詞を搆ふ潘岳と友とし善し行止毎に輿を同うし齒を接す時人之を連璧といふ

(158) 橘廣相諸兄の來孫なり（玄孫の子をいふ）幼にして穎悟書を讀み文を屬す年九歳にして昇殿し制に應ト 暮春即興を賦す其句に云く荒村桃李猶應愛何況瓊林華苑春長するに及て博學多識仕官し累りに參議に任ず橘氏文集あり世に行はる

(159) 藤原敦光幼にして學を好み經史を涉獵し能く文を屬す手卷を釋て（目をとほす）ず行歩の間といへども口古文を誦す遂に儒雅の名を成す

(160) 藤原衛は左大臣內麻呂の子なり幼にして母を喪ふ哀慕人を感す七歳學に入る文章生を以て登第す人之を漢の賈誼に比す出て丶遠江守と爲る不法を論駁し貴戚を避けず喜祥中宴を渤海使に賜ふ侍臣の辭令を善くする者を妙撰（ふりぬき）す衛其選に當るといふ

(161) 紫式部越前守藤原爲時の女なり資性敏慧幼ある時人の書を讀むを聞く皆能く諳記す爲時常に曰く惧らくば汝をして男子たらしめざ

る事藤原宣光に嫁す女賢子を生む宣光卒す獨り女と居る吟咏自ら娛む源氏物語を著す空ゐ架し虛に憑り古今に度越す

藤原家隆幼時の心だて

(162) 藤原家隆少時藤原俊成に從て歌詞を學ぶ俊成の曰く後來吾が道を得て稱首と爲らん者は必ず此生ゐらん唯風雅の用心を問ふのみ他人の動もすれば先づ難義を問究するに似ず

小式部十三歲の時の和歌

(163) 小式部の母和泉式部其後夫藤原保昌と共に丹後の國に赴き小式部獨り京に留まり居たり或る時歌合のありけるに小式部其中に加はりぬさて此頃小式部の歌は母の添削を經或は代作ゐゑゝ取沙汰したりしにや折しも中納言定頼小式部の許に參り歌は如何にや丹後の使はまだ戻らぬにや待ち遠き事におぼすらんといひ戲れて起ちたるを小式部袖引とめて大江山幾野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立と口占ければ定頼大に恥らひたりしと是れ小式部十三歲の時の事なり

何づれも丹後の名所

文と踏とかゝ

源肖柏幼時聯歌を善くす

(164) 源肖柏幼にして穎敏聯歌を善くす甫て八歲嘗て字を習ふ人背後より之に戲れて曰く母能袁母以波傳毛能那良布比登肖柏即ち書して曰く久知南志能波奈能以呂波也宇都寸羅牟其の人大に感歎す年既に長ず名聲益著はる常に茗香花の三物を愛す三愛の記を作る後柏原帝其名を聞き便殿に召見し給ふ發句並に聯歌を詠ず時人之を榮とす

有智子內親王詩を賦して觀感を受く

(165) 有智子內親王嵯峨帝の女なり頗る史漢に涉りかねて善く文を屬す帝嘗て其山莊に幸し文人に命ずて詩を賦せしめ給ふ內親王韻を探り塘光行蒼の四字を得便ち筆を瀝ふして曰く寂々幽塘水樹裏仙輿一降一池塘栖林孤鳥識春澤隱澗寒花見日光泉聲近報初雷響山色高晴暮雨行從此更知恩顧渥生涯何以答穹蒼と時に年十七帝大に之を賞し從三位を授け又御制の詩を書して之を賜ふ

林羅山幼時父に代て鐘銘を作る

(166) 林道春幼にして家貧し父會病めり時に鐘銘を請ふ者あり父其の病にかゝるを以て遷延日を移す囑する者頻りに之を促せり道春藥餌に侍し時々火箸を以て灰中に何か頻りに書きしかば父怪て之を問ふ道春對て云く父病み鐘銘久しく成らず囑する者懇請して錯かず兒之を憂ひ故に竊かに之を屬し今試みに灰に書せしなり父云へら

くしからば書し見せよと一片の古紙を與ふ道春其背に書し以て示せり父之を見るに行文遒麗(しうれい)にして旨意詳明あり乃ち驚歎之を久ふせりと時に道春七歳反古の銘(立派)として今猶ほ林家に存すと云ふ

新井白石少時七律を賦す

(167)

新井白石少時冬日林學士の家を訪ふ時に主人容奇(ゆゆ)の二字を書して以て詩を求む白石雪の字の和譯たるを以て其意を解し句々故事を我邦に采り輒ち筆を援り立ところに賦して曰く曾下瓊鋒初試雪紛々五節舞容間一痕明月茅渟里幾片落花滋賀山提劒膳臣尋虎跡捲簾清氏對龍顏盆梅剪盡能留客濟得隆冬無限寒と一座其敏警に服せり

祇園南海十四歳の時七律を賦す

(168)

祇園南海名は瑜業を木下順菴に受く幼より才調無雙尤も詩を善くす年甫て十四白石南山霞沼萱洲等と雨森芳洲(皆當時の名士なりの寓居に集まり南海即席邊馬有歸思といふ題を賦して云く遠逐將軍度雪山九秋大漠劒華間胡塵四起風悲塞羌笛一聲月照關却恨曾逢伯樂顧長傷未得旄頭問沙場幾歳摧毛骨何日華山休戰還と座に在る者皆瞠若(おどろくさま)たり白石の曰く此詩雄渾悲壯以て後來斯文に任するを卜するに足れり又十五鳶飛魚躍活潑々地に對するに光風霽月常惺々法と云ふを

十六歳の時燭一寸を限て七律を賦す

以てす芳洲稱して的對(ぼつれいつい)と爲す又十六席上燭一寸を限り題を探り昇雲聞星を賦して云く紫微遙齎彩雲迎衆緯森々白玉京月傍九重瑤闕冷風飄五色羽衣輕錦城夜靜星梭響環珮秋深天步鳴應是鈞天夢中到不勞遠問漢君平又嘗て春分に會し自ら其才を試んと午より子に至り五言律一百首を賦す人或は宿搆(前作)かと疑ふ是歳秋分大に賓客を會し席間題を設け飲酒談笑の間筆に信せて揮霍(ふるひちらす)し日中より夜半に及び復た百首を得たり前後二百首詞藻富麗一句の踏襲(重複)あし時に年十七是に由て才名大に播揚(ひろがる)せり

十七歳の時五律二百首を賦す

第十　詩賦下

英のスコット幼時故跡を幽訪す

(169)

ウォルテル、スコット一千七百七十一年を以てエヂンバラに生る資性至て壯健にして活潑ありしが生れて十八ケ月に及て烈しき熱病に罹り遂に跛となれり病後空氣の變れる處に移るべしとて祖父の村舍に住せり其近邊にスメイルホメルといへる一基の塔聳立し頽敗せる城郭剝落したる寺觀及び傾圮(やぶれる)せる樓臺ありて此嬰兒の目を驚

ち其想像の心に觸るゝや甚だ強く老死の日に至るまで存して失せざりけりスコット早くも其所の農民に甚だ愛せられ新鮮なる空氣をうけんとて老僕に負はれ野外に徜徉する時は農民の之を見る者歡接せざる事なし羔羊の草地に牧せらるゝを喜び其中に遊歩し此時景に觸れ情を動かせしもの身を終るまで忘るゝ事能はず稍長ずるに及び或は小驢の背に乘り傳聞に存する古代の事跡を好みて幽物討せり其八歳の時海水に浴すべしとて誘はれて古跡ある某の區に好きにさがす至る此處にて一人の老兵に遇ひ之れと親睦し其故事を談するを聞き歡善限りなく此老兵も喜て自ら經歷せしセルマン數度の合戰を說き傾倒して遺す事なし此時深く注意せし事後來に證知せられた底をたゝいて りそれより父の許に歸り少しく學びたる後ち學校に入り學士アダムより教をうけたる時某の詩を譯し稱譽せらる直ちに大學校に入らるべきなるも身體快あらざりしかばケルソといふ村に住する姑の家に移りそれが養育を受くケルソは蘇格蘭の風景絶美なる村落なり此處に在て情を山水に玩び目を烟霞に樂ましむ時としては園中

八歳の時一老兵の戰話を熱聽す

十三歳の小童情を山水に玩び目を烟霞に娛ましむ

の大樹に登り遠景を眺望し低徊徙倚屢〻食を忘るゝに至る此れ十三歳の時の事なりスコットたちさりかれ嘗て自ら言へらく我れ始て少許のシルリングを有ちし時好む所の書を買ふ事を務めたりと其記性の善き事尋常に踰へ又其讀む所のものを好て談話せしとなん特にスペンセルの詩人の名の詩を好み其詩中に述る所の英邁俠然の男子婦人の事を喜びしが從來の詩材とはありにけり一千八百二年に至り一の著名なる詞曲を著せり此詞曲一たび出てゝ始て一世を傾動し文壇の雄將と稱せらる其後種々の著作相繼て世に出でしが何れも皆巧妙の絶作なり一千八百二十年英王スコットの文事に功あるを嘉みしパロネットの爵を以て稱賜せらる

一千八百二年有名の詞曲を著し一世を傾動す

一千八百二十年パロネットの爵を賜す

(170)

マッキントシ其名をジェームスといふ一千七百六十五年を以て生る父はカピティンの一隊の長にしてマッキントシ生るゝの後直ちに軍に從ひ多年の間家に在らざる故に其母及び祖母懇に之を愛養せりマッキントシ生れし所は大湖ありて岩石樹木之を圍み湖光澹蕩なだらかとして碧空を浮べ林影參差そろはぬ事として明鏡に映す溪流あり清泠掬すべく草蘚あり淨綠塵

英のマッキントシ幼時山水に性を養ふ

十三歳にして政事を思察するを嗜む

益友を得て才識を長す

英のジェッフレイ八歳にして同朋に超越す

するに堪へたり此等の風景幼童の心に印し記臆に止まり久うして抹せず老後の日に至り屢〻其想像に顕はれ筆墨に流露せりマッキントシ十歳にして某の學校に入り年十三に至り政治の事を思察するを酷だ嗜みしに會〻是の頃當時の二大臣亞米利加の戰につき互に反對の說を持し各〻卓犖たる辯論ありしがマッキントシ想像の才忽ち之れに傾き穎異の衆童を會し分て二黨と爲し自ら一黨の首と爲り新聞紙より知りたる軍國の大事を議論せしにマッキントシ互に兩黨に加はり其雄辯快舌一場を歷せしとゞ後ち有名なるホールベルト名はロと相識る事を得たりホール才識器幹あり其談論大にマッキントシの心を感ト遂に二人同居し各〻殊異の說を吐き反對の論を爲し爭辯して止まず之れに由て互に相進益し優に同輩の上に超えたり一千八百三十年の後通俗英國史及び修身學沿革史等の諸書を著はし次第に刊行し大名を一世に博したり

(171)

ジェッフレイは其名をフランシスといふ一千七百七十三年エヂンバラに生る父は刑部の書吏なりしジェッフレイ幼にして私塾に學びし

自ら奮ふて迷謬の妄念を懲らす

が既に此の時頃よりして聰明英邁の天性を顕はせり八歳の時エヂンバラの高等の學校に入る此處に在る四年の間拉丁語を學びしが等輩を超え上級に昇れり一日當時文壇の名家なるボスウエルコ進へりジェッフレイの頭を撫て激勵して曰く足下始めて發程せし如く進み行て已まざれば足下必ず我れボスウエルの如き生涯を做すべしと云へり一千七百八十七年某れの大學校に入り評論及び理學に於て辨論の才を顕はせり後ち理學の生徒と爲り才能等輩に超えたり是に於て學問文藝の才識を養ひ長せんと欲し獨り非常の勤勉を以て顕れしのみならず又規法を逐ひ次序に循ひたり毎日筆墨に從事し講說翻譯詩賦談論大抵批評を旨として作り出せりジェッフレイ不前に出づ

纚豪宕の性に似氣なく少時不思儀にも迷謬の恐懼を抱き〻(編者曰く夫れ人の僻たる往々其性に相反形するものあり奇といはざるべけんや)自ら其笑ふべきを知れども之れを制する能はず曷に於て一計を案出し黑夜深更獨り起て古寺荒墳の間に徘徊し以て之を懲治せしと十九歳に至り其才能を文藝に遇くし特に韻語を嗜好せり一千

八百零二年エヂンバラ評論を始て世に公にせし時ジェッフレイ二百余條を其中に出せしが其事公論と爲りて神益を爲せし事少からざりしと

英のキッポン七歳にして牧師に從學す

(172)

キッポン其名をエドワドと云ふ一千七百三十七年を以て英國某の地に生る幼時甚だ軟弱にして屢病みしが其姑之を愛養撫育し幸にして生命を全ふする事を得たり七歳にして某の牧師に從ひ教をうけ二年の後一私塾に入る此時母歿し其後ち父後妻を娶りしが其性温和聰慧にして事理に通ト善く義子を愛養せしかばキッポン亦眞の母の如く親み事へたりキッポンの姑は能く事物を知り趣味と解せし婦人ありしキッポンをして其性に適へる當然の門徑に向はしめんと欲し苦心して好書を擇び之れに授讀せしめキッポン遂に深く歴史を好むに至れり十五歳に及び身體も壯健に爲り某の學校に入學せり後ちまた一牧師に從て學しこと五年其教導最も善く進益甚だ多かりしと爾後暫く兵務に從事せしが英國兵を休むるに至り佛蘭西伊太利に漫遊し平素絶好の史書を著はさんと欲せしかば羅馬に抵り古

筆を載せて羅馬に遊ぶ

跡を探り其衰亡せし情狀を寫し出さんと欲する思念始めて萠せりといふ遂に力を史筆に專らにし一千七百七十六年に至り羅馬版圖衰亡史記の第一冊始めて世に顯はれ忽ち戸ごとに誦し家々之を藏するの盛なるに至れり次篇續々皆大に世に行はる

羅馬衰亡記を著して世の耳目を驚かす

編者曰くキッポン氏夙に古史を著さんと欲するの志を抱き嘗自ら筆を載せ羅馬に遊び親しく其情景を察す務めたりといふべし爾時寒烟慘澹の中に低回し今昔の感久しく胸中に鬱積する者今發して而して筆に上る宜なるかな其能く人を動かす事

英のジョンソン幼時艱難にまさぼる

(173)

ドクトル、ジョンソン幼き時は艱難困苦に纏はれ實に憐むべき有樣なりしが終に天縱の奇才を以て富貴顯榮の地位に達し英國文苑の名家の中に在て巍然たかくして傑出したり其著書の後進に益あるは勿論一時の瑣話茶ばなしといへども教へと爲りまた怡愉の具と爲る者少からず氏千七百零九年を以て生る父は賤しき生れにて初めは書肆なりしが能く羅甸語に通ずるを以て選ばれて其所の市都の長官と爲れり母は怜悧の人にして篤く宗教を信ト常に其子に教旨を授けゝれ

ば之れに化せられ生涯熱心の宗教家ありきジョンソン怪む程の記性を有し(學問の部を見るべし)十歲にして羅甸語を習へり近視ある故他の童兒と共に遊戲する事能はず小說野史の類を讀て慰み休課日は野外に散步し常に一人の友を伴ふといへども談話も爲さず山を眺め水を望み獨語して樂みしと(編者曰く亦た奇雅の事といふべし余私かに感する所あり嘗て中村敬宇翁に此事を譯敘せられん事を請ひければ翁一詩を賦して與へられたり今此書を編するや翁已に逝く數月此に之を錄して以て聊か追感の念を慰す其詩に云く我聞潤孫氏學術用心深。倦來步野外。逍遙豁胸襟。俯弄清泠水。起望翠微岑。一僮借之往。不語似痴瘖。其性褊急過嚴ありしかば往〻人に假さゞる(宥免せぬ)の弊あるを免れざりしもまた自ら期する所非常にして何等の困難に逢ふといへども決して已れを屈して人に倚らず自ら謂へらく尋常の人あればいざ知らず我れ天稟の才智を以て艱難を掃蕩し名を立るが如きは至て容易の事といふべし豈六尺の身を屈して人に倚らんやと爾後其の言の如く幾多の艱難を驅除し有名の著述詩人傳

艱難を驅除して大功を奏す

を出版せしが忽ち世人の尊崇をうけ批評家を以て目せらるゝに至れり當時國王の感感を辱うし年給若干とドクトル、ヂフローの位級を賜はりチャクスフォルド大學校よりも同一の階級を與へたり

ドクトル、ヂフローの位級を賜はる

編者曰く宋の呂東萊言へる事あり云く弱は天下の大害學者の大患と則ち剛の用廣く且つ重しと謂ふべし而してジョンソン氏に於て特に之れを見る

英のポープ幼時讀書習字及び詩作を嗜好す

(174)

ポウプ其名をアレキサンデルといふ一千六百八十八年倫敦に生る生れ得て眉目明秀(すぐれ)丰采(かたち)俊雅しかるに蒲柳の質(よわきうまれ)屢〻疾病にかゝり長ずるに及で行步常に杖(つえ)を携ふ小兒の時其聲美好にして人を悅ばしめしかば其父母之を愛し名を小鶯と喚びしとぞ其姑之れに讀書を敎へしに忽ち之を好みまた習字を好み後來善書を以て稱せらる及び詩を作る事を學び前人に超過せんと欲し心力を盡くせり其學校に入るに及ても時に遇く英國の詩詞歌曲を閲みし最もドライデン詩人の名の詩を喜び之を以て模範と爲し且つ一たび其風采に接せばやと切に思ひ居たるに後ち幸に相見る事を得平生の渴仰を慰し感應の

十二歳獨居歌を賦し十四歳幽靜賦を作る

十六歳の時牧童歌を作り大に稱譽せらる

利益をうけたる事いか斗りぞや其十二歳の時「獨居歌」を屬稿しまた某の古代の詩を今世の英語に改め巧力を費せり十四歳の時某の大家「無物歌」に倣ひ「幽靜賦」を作れり識者之を賞して少年の未だ世故を經ざるものにして多く人物を識り事實に暗熟するポップの如き者其例多からずと云へりしとしかるに之を以て自ら足れりとせずまた倫敦に遊び或るは法蘭西語を學び益〻人倫事物の上に經檢して自得する者を加へたり其父の林園に歸るに及び專心一力詩歌を作り凡百の體裁試み用ひざる事なし心中の蘊蓄發敍せざる事なしをかる後ち自ら絶大の英才と思ふ程に至れりと十六歳の時文學の海に乘出だし「牧童歌」を作り大に時人に賞譽せらるポープの言に云く我れ十四歳より二十歳に至るまで唯〻樂趣に供するために書を讀み二十歳より二十七歳に至るまでは教訓を受け進益を享けんと欲して讀みたりとポープ文壇に旌旗を建て全勝を得るといへども其勤勉の心之れに由て少しも弛まざるのみならず更に勇氣百倍し身體强壯ならず常に疾病に苦ひといへども事ともせず勉强忍耐して絶妙

少年文家の龜鑑

英のニウトン幼時種々の機器を構造す

天文數理に於ける後生の師表たり

間長涯十二歳にして渾天圖を擬造す

の境に達せんと欲し遂に其志を成就せし事世の少年文墨に從事するものゝ龜鑑（てほん）とあすべきあり（ポープ文壇以下原著者の言にかゝる）

第十一　技藝

(175) アイザック、ニウトン一千六百四十二年英國某の地に生る人と爲り溫順にして而して穎敏且つ學を好み躬自ら淬勵（きたひ）已に家訓を卒へ十二歳グランタムの語學校に入る其の校に在るや屢〻種々の機器を構造し人其精巧に驚く蓋しニウトン他兒遊戯の時に當り尙ほ獨り拮据（手足なや）經營（すめい）未だ嘗て寸陰を空うせず遂に其天文數理に於る新撰獨得後生の師表たり

(176) 間長涯名は重富大阪の人世々典鋪（質屋）を業とし襲（つい）で十一屋五郎兵衛と稱せり長涯幼にして容止凝重（おちつき、しつかり）嶷として成人の如し年甫て十二渾天圖を見反復之を玩び後ち數日手自ら竹木を揉輪し一儀器を造りしに少しも差はざりしかば人皆驚きあへり既にして弱冠始て星像（天文）の學に志し遍く古今の曆書を求めて之を讀み夙夜覃思研鑽（考へつめみがきとげ）し去かし

て後ち洋暦の精にして易ふべからざる事を悟り乃ち專ら之を攻め又清の乾隆定むる所の暦象考成後篇を得益〻發明する所あり後ち德川幕府の徴に應ト暦局に仕へ功績あり白金及び裏食宅地を賜ふ

英のジエームス幼時讀書を熱好す

(177)

ジエームス、フェルガッソンは蘇格蘭小農の子なり一千七百十年を以て生る其家貧しければ兄弟姉妹皆學校に行く事を得ず父勞作の余暇を以て之を教へたりジエームス最と幼稚の頃舍兄の讀書を習ふを羨ましく思ひ己れにも教へん事を數〻乞ひたれど父は尚ほ早しとて教へざりしかば兄の習ふ時傍に居て之を聞き忘れし所は近所の一老婆に問ひ質し獨り讀書習字を學びたり一日父ジエームスが頻りに書見し居ると見て大に驚き始めて前條の次第を知り既に多くの文字を覺へいまだ教へざりし書物をも讀み得るゆゑ父が喜び云ふ計りなく則ち之を教授しけるに忽ち上達し修業を卒へんがためケースなる中學校に入り止まること僅か數月ありしかど其得る所少からざりしと此頃家の屋根年を經て傾きたるを修覆せんとて父が木槌を用ひて造作もなげに凹みたる屋根を持ちあげ元の位地に直しければジエームス見て疑ひを生ト如何あれば重き屋根を一人の力にて持ちあげしかと種〻考へ居たるが忽ち父が木槌の端を壓せしに氣付き思ひしは木槌長ければ益〻勞力を減ずべしと自ら棒を以て石なぐを擧試るに果して左かりしかば是に於て又思へらく物を高き所なぐに上るには一個の車輪を造り此軸へ其物を結び付之を回す時は大に人力を減ト又車輪を大にすれば從て人力を省く事を得んと則ち小刀を以て車輪を造り之を試るに案に違はず終に書物や教師の助けを借らずして器械學上の大發明を爲せり時に七八歳の小童ありきジエームス、委細此發明の次第を書き或る人に示せしに何ぞ計らん是れ既に古人の發明せし所にして已れが新發明にあらざりしかど吾が考へへの古人と符合せしを感ト是れより力を器械學に傾け只管勉勵したりしも家貧しく且つ天資多病にして手荒き業に堪へざりしかば人に雇はれて牧羊ゐ從事せし傍らに晝は水車紡績車風見等何にても目に觸れたる物の雛形を造り又不圖天文に心を止め夜は天を仰て星の數月の廻り樣等を觀察せり其の主人頗

七八歳の時器械學上の大發明を爲す

家貧して牧羊に雇使せらる晝は機器の雛形を造り夜は星辰の行度を測る

天文を以て家を興す

佛のダアレムベルト十二歳にして聖徒ポールの尺牘の注解を著す

る深切に取扱ひ牧羊の暇には氏をして隨意に其の好む所を爲さしめしかば其喜び限りなく毎夜ケットを以て身體を取卷き細き絲に南京玉の如きものを通し之れを巳が目の前に引延ばし玉を左右に動かして調度星の上に來らしめ順次此くの如くして星の位地を識せしを主人見て之れを笑ひしが能く其解明する所を聞き其無益ならざるを稱し後ちには勸めて之を爲さしめ氏が星の圖を書く時おのには自ら之を助力せりとて終に天文を以て家を起し顯達の其後も常に其厚意を鳴謝せしとぞ

(178)

ダアレムベルトは佛都巴里の人にして一千七百三十七年を以て生るいまだ幾何おらず母故ありて兒を置て去りければ霜深き冬の夜泣叫びつゝありしを通行の巡査介抱して生死にかゝるまでに疲れたる容體ありしを或る硝子屋の妻に養育せしめしに此婦人善く深切に慈育し又ダアレムベルトの父も之を聞知り金を投して養育の資と爲したり十二歳の時某の學校に入りしに幾程もなく聖徒ポールが羅馬人に送りたる書牘の注解を著し大に世間の稱賞を得たり

全力を數學に用ふ

幾何學中第一等の人と稱せらる

佛のパスカル幼にして物理を探究す

後ち其性の投する所に從ひ全力を數學に用ひ日夜の別おく勉勵研究しけるを見て他人は勿論深切なる養母さへも片腹痛き思ひを爲し時に或は汝は死後徒らに人の口傳に遺るより外おき愚かおる理學者と爲る積りおるや理學者おゞは到底世に出る事の出來ぬものありなゞ云ひけれゞも幸に養母の豫言に似ず一文を當時有名なる碩學者の集窟たる理學會社に寄送せしに忽ち諸名家の賞贊を博し二十二歳を以て此社の人員と爲るを得たり此弱齢にして此社に入りし者前代いまだ嘗てあらざりしと後ち二年を經て一書を著はせしに幾何學者中第一等の人たるの評を得爾後陸續として著書あり皆大に世間に感稱せらるダアレムベルトの名歐洲に喧しく普王の如きは氏を招て伯林に移住せしめんと欲ずるに至れり

(179)

ブレース、パスカル一千六百二十三年佛國某の地に生る父は地方裁判官たり博學多識最も數理に通ずパスカルの天才衆に出るを以て自ら善く之を成達せしめんと欲し遂に官を辭し之が敎育に從事せりパスカル幼にして物理を探究する事を好み之れが解を得れば則

十一歲にして音聲の原因を發明す

十二歲にして自得の妙幾何の眞理に通ず

ち喜び自ら禁へず人に問ふ事あるに其答ふる所明了ならざれば直ちに他に往き再び之れを討究し其理由を發明せざれば措かざるの氣質ありし一日不圖皿に觸れたるに樂音を發し再び之れに觸るゝに其音止みたるを不審に思ひ是れより日々吟味考案を盡くし終に音聲の發する原因を發明したり此の時漸く十一歲の小童ありしといふパスカル最も算才に秀づ故に專ら算術と治め稍讀課を怠りしかば父甚だ之を憂ひ諸算數の書を封鎖し且つ之を口にせず云かれども パスカルの熱心ある未だ嘗て心を數理に留めずんばあらず一日父に謂て曰く幾何は物の正形を成し且つ其比例を探知するの法を敎るものあり云かれども汝暫く謹て此等の事を言ひ且つ之を思ふ事を止めよパスカル之を聞き直ちに室に入り木炭をもて種々の形體を牀板の上に畫き之を考究し忽ち幾何學の蘊奧を悟り自ら定義と單元とを設く一日父其室に入り之を見其の何物なるを問ふパスカル詳に其理由を說くに能く幾何の眞理に通ず時に年十二未だ嘗て幾

十六歲にして圓錐形を論ずるの書を著はす

未だ十九歲に至らずして名聲天下に噪ぐ

ダウ幼にして能く其讀みたるものを記臆し容易く之を說話す

何論理の書を目にせず自得の妙遂に此に至る父大に感ずる所ありて幾何論理の諸書を購求し之れに授與し親ら之れが師と爲り專ら之れに敎授す十四の頃既に文章を能くし十六歲に至て圓錐形を論ずるの書を著す當時碩學と雖も其奇才に驚かざるはあし尙は十九歲に至らざるに有名ある數學の機器を創造し名聲天下に噪くパスカルの數學に秀づる當時諸學士の決して答る能はざる至難の問題皆其力に依り之れが解明を得しといふ

(180)

舍密の大家にして彼の安全燈の發明者あるサー、ハムフレーダウ一千七百八十八年を以て生る父は彫刻を業と爲せり幼にして小學に入り能く其讀みたる事物を記臆し容易く之を說話する事を得また已が室を洒掃整頓し朋友を招き聽聞人と爲し講義の如き事を擬設せしと此頃よりして化學を好ひの氣性を現はし其他小說を書き詩を作り或は自ら作りたる演戲あそを舞躍する事を好み多藝の人と爲るべき兆證を現はしたりダウ諸方に旅行する事を好み或は馬上或は徒步にて近隣の地に遊び一日は竿を携へて川に釣り一日は銃

最初の經驗

を負ふて山に獵りまた自ら小なる園地を造り美木奇卉鳥魚の類を畜養するを以て樂みと爲しかくて年を經る事十六にして父を喪ひ翌年藥商の所に至り史、數語、醫藥の諸課を學び驚くべく智識を進めたりダウ*が最初の發明經驗は地上の植物は地上の動物が呼吸すべき空氣を新鮮ならしむるものにあらざるかまた水中の植物は水中の空氣を平整ならしむるものにあらざるかとの二題を吟味せしと云ふ其用ひたる器械は粗末なるのみならず不足なりしかど已れが技倆を以て種々工夫をめぐらし遂に經驗を遂けたり今や學業も大に進歩しければ是れより遊歷し良師を求めて學ばんと出掛けたるに幸にシルベルトといふ人に知己に爲りシルベルト大に其の才學を感ト信切に其所有せる舍密器械を示せしかばダウ*喜ぶ事限りなく茲に始めて名のみ知りたる種々の良器を實視したりシルベルトまたダウ*を伴ふてドクトル、ベッドースを訪ひ之れが推薦を以て空氣の事に關し檢査する某の役所の監督と爲り此に在る間に諸般の經驗を爲し之を書に上せ世に頒ちしかば大に實理學者の注目する所

一千八百十七年安全燈を發明すパロネットの官職を得

英のトマス幼にして能く詩を賦し畫を作る

五歳にして肖像を畫く

と爲りダウ*の名聲忽ち世上に傳播ゑたり遂に一千八百十七年安全燈を發明し三年を經てパロネットの官職を得るに至れり

(181)

サートマス、ラウレンス英國著名の畫工たり一千七百六十九年生る父時に旅泊を業とすトマス幼時より能く詩を吟ト畫を爲り己に頭角を顯はせり父母之れに誇り貴客宿するに會すれば則必ずトマスをして詩畫を爲さしむ嘗て某の侯伯夫妻其舍に宿す父其室に至り謂て曰く豚兒僅に五歳願くば貴需に應ト詩畫を試みしめん且つ之れを呼ぶトマス杖に跨り躍り來り貴人の前に進む面首の秀美なる心氣の活潑なる誠に愛すべきの一佳兒なり夫人兒を抱き其良人を指して曰く汝彼の大人の肖像を畫く事を得るかとトマス目を張り暫く侯を熟視して曰く吾れ之を能くせん吾れまた之れを好むと乃ち人をして畫具を携へ來らしむトマス其間を以て再び杖に跨り室内に跳戲す畫具已に整ふトマスをして卓上に登り以て畫かしむ瞬間之を卒る其完美なる觀る者驚かざるはなし已にしてトマス戸外に出で奔り遊戲に就かんと欲す侯百方之を留め夫人の肖像を畫か

十歳の比ひ畫法高尚に赴く

十三歳の比ひヤソ變身の畫を作り美術會の褒賞を受く

伊のカノバ九歳にして雕刻を能くす

ん事を求むトマス曰く吾れ之れを能くせんと云かれども貴女の顏直あらず願くば其側面を寫さん一坐失笑(ふきだす)蓋し夫人嘗て面部を傷ひ鼻梁少しく屈曲するを以てあり既にして之を畫く後ち二十年夫人の友人之を見て曰く夫人昔時の容貌更に此肖像に異なる事なしトマス十歳の比ひに至り其畫法漸く高尚に赴き名聲諸方に施し十三の比ひ耶蘇變身の畫を爲り之を美術共進會に出す大に世の賞讃をうけ該會賞するに銀杯一個並金五ギニー(凡そ我が二十五圓)を以てすと云ふ

(182)

アントニヨ、カノバは伊太利の人にして一千七百五十七年を以て生る三歳の時父を喪ひ母再嫁しければ祖父ピサノの許に在て養育せらる天稟多病にして醫藥を絶たず稍〻長するに及て他の兒童の遊戯に與せず常に家に在て或は祖父の雕刻するを見或は祖母の樂器を弄するを聞きかくて九歳の頃には早や祖父の助手とも成る程巧に雕刻し得るに至れり一日祖父の相知る一貴族の邸に盛宴あり縉紳貴族を招待し館中の裝飾美を盡くし善を極めしに獨り猛獸の種像を闕きけり一家の人〻急に之を整へんと欲しピサノに此事を謀る

十三歳の時牛酪を以て獅子を摸造す

名聲益〻高く術業愈〻進む

に流石(さすが)のピサノも大に之に困ト即今之れを造るといふは甚だ難し如何はせんと頻りに考へ居たりけり此時カノバ祖父に伴れて坐よ在りしが忽ち工風をめぐらし牛酪を以て獅子を摸造したるに甚だ巧妙なりければ一座の人〻大に感ト殊に主人の喜びいはんかたなくカノバ此所へと呼びければカノバ恐る〳〵綺羅星の如く集りたる貴紳の前に進みしかば皆々聲を放て稱賛したりカノバ時に年十三なりしといふ是れより當時有名の雕刻師の許に送て傳習せしめけるにカノバ黽勉弛みなかりしより忽ち進歩し歌師朋友の目を驚かせり二十四歳の時羅馬に遊び名聲益〻高く術業愈〻進み英佛の帝王の如きは其名聲を慕ふて之れに恩賞を與へ羅馬教王は之れに賜ふにイスチヤ侯の爵名を以てし且つ氏が彫刻せる諸物中殊に精巧なる者は外に出す事を許さず羅馬國千秋の裝飾と爲さんと欲するに至れり

(183)

ベルヂル、ソルソルドセンは嗟馬國の人なり一千七百七十年に生る父は木材の彫刻を業とし家頗る貧しかりしを以てベルヂル初歩の歌

嗜のベルデル十一歳にして圖畫を能くす

育をうけずして直ちに專門科に入りければ讀書手跡等は甚だ疎かりしかどされど其技術に長する甚だ著しく十一歳にして圖畫を能くし父を助けて其の彫刻すべき形狀を畫するに其出來殊に宜しかりければ之れがため得意も增加し子のために父の名も揚りたり父は遠大の利を計ることを知らず目下の小利に眩惑しベルデルを退校させ只管已れの助手と爲せしかば校中の諸生相議して曰く彼れが如き才物を中途にして退校させ空しく一生を終らしむ豈遺憾ならずや吾等何處までも盡力し彼れをして充分其伎倆を發達せしむべし是れ朋友の義務にして且つ國のためにあらずやと是に於て周旋頗る勉め遂に之を呼戻し其學に從事せしめ果して天下の名士を成立せりかくてベルデル再び學校に歸り定期の大試驗に金の小賞牌を得たり初めベルデル其試題を見て大に驚き是れ吾が力に適せず及ばざる事を企てんよりは寧ろ試みざるに如かずと竊かに其室を脱れ出でけるを敎師認めて其失望したる所以の實を聞き懇諭したりければ其言に服して又手業に就きしに四時間斗りをへて成就

同朋ベルデルの才を惜しむ

大試驗に金の賞牌を得

盛名を全歐に施す

ピウサッキ幼にして畫才あり

十四歳にして彫刻に從事し遂に大名を揚ぐ

し其成るに及て却て他童に勝れ思はずも此賞牌を得たりしかば吾が失望の早計なりしを知り且つ此次の試驗には吾れ必ず金の大賞牌を得べしと力を得て勉强しけりとなん金の大賞牌は此校第一等の賞なり二十四歳にして業を卒へ且つ該校より褒賞として三年間遊歷の資金を與へたり終に全歐州の人氏が盛名を知らざる者なきに至れり

編者曰く該校諸生ベルデル氏のために謀る實に其言の如く小にしては則ち朋友の義務大にしては則ち國に盡す所以何ぞ其美事なるや學朋の龜鑑と爲すべき事になん

(184)

トマス、ピウサッキ一千七百五十三年生る幼にして畫才あり牆壁戸版皆白墨を以て之に畫く其畫く所彫刻師某の目擊する所と爲る某甚だ之を感ト强ひて父母に請ひ已が徒弟と爲すピウサッキ欣然之れに從ふ時に年十四後ち木版彫刻を以て大に名を揚ぐといふ人幼時に當り自已の方向を誤り其天性に適せざるの事業に志し終に其事を果さず後ち甚だ悔ゆる者少なしと爲さず是れ憐むべきの至りなり

夫れ人間萬事忍耐勉强に依て熟達せざるはなく又以て幸福を蒙らざる者なしといへども彫刻圖畫等の美術に至ては則獨り之れに異あり自然の熱心及び天稟の才能あるにあらずんば其修業の勞全く徒方に歸し無益に屬すと爲す幸ひピウッキ希世の天才を有し之れに加ふるに勉强の功を以てし終に其志を達し自己及び社會に福益を來たす事を得たり（人幼時以下原著者の評語に係る）

ナポレチン幼時古英雄の功業の物語を熱聽す

別錄

ナポレチン、ボナパルト幼傳

(185)

ナポレチン、ボナパルト一千七百六十九年地中海の一小島コルシカに生る父は狀師たりシヤールボナパルトといふ母はレチヤアラモリノといふ生るゝに先たつ二月此の島佛國のために攻取せらる呱々の聲鬨鬨吶喊（とうとうとつかん）の中に起る稍長ずるに及て其母語るに古英雄の事跡を以てすナポレチン熱心之れを聞く蓋し他日の大功業此時已に感化養成すといふナポレチン群兒と遊戲する事を好まず其出遊するや常に獨行を爲し或は懸岸絕壁の上に坐し烟霞を吸噓し奇秀を收攬し或は深山幽洞の中に入り潛思默想す（すひこみ、山水の靈氣にうたるゝ事）ヴヨンソン氏の少時と稍其趣きを同ふす）ナポレチン好で史書を讀みために大に其の心智を開き才識を長ず時にコルシカに老將ポリーといふ人あり武事に熟達せり屢〻ナポレチンの家を訪ひ英雄の偉勳武勇の故事を語るナポレチン之れを樂聽し喜び自ら勝へずポリー益〻之を愛し謂て曰く子は童子にあらず吾が好友ありナポレチン忽ちにしてコルシカ全島古今の事狀を諳ト更に他國の歷史記傳を涉獵し其讀書を熱好し智識を貪愛する饑渴の飲食に於るが如しコルシカ既に佛の版圖に入り總督を置て之を治む其の總督マルボウといふ人ナポレチンを一見し其智識に驚き其才器と勉學とを嘉尙し勸めて佛國の兵學校に入らしむ此の時十二の縣立兵學校あり國中少年學行卓絕なる者を選拔し其生員に充つ故に其校に入るを得るや名譽の事にして而して

史書を讀み心智を開き才識を長す

讀書を熱好し智識を貪愛す

少年天下の好儀範

十歲にして佛國の兵學校に入る

極めて容易ならず然るに摠督の選擧とナポレオンの學問の優等に由て遂にパリスに近きブリンヲの學校に入る事を得たりコルシカ十歲の童子にして此事ありしかば一時全國を鳴動せり我が國先哲の言に曰く人の此世に在る常に機會あらざるはなし機會來ると雖も我れ之に應ずる豫備の支度をければ其の機會を拿らへ得る能はず機會の至る即ち幸運の至るなりナポレオン幼時より勞苦を以て慣習と爲し光陰を虛度せず學問の準備を爲し機會を失はず自己の力に由り命運を造出せり豈天下少年の好儀範にあらずや

一千七百七十九年ナポレオン十歲にして佛國の兵學校に入らんとす流涕して別を母及び兄弟姉妹に告げパリスに至り宮殿寺觀街市園園の美を觀また人民の蕃庶を覽其の盛大に驚く何ぞ意はん是の大都衆民他日止其掌握に歸するのみならず全歐洲の帝王皆其の顧指氣使する所とあらんとは抑其のブリンヲの兵學校に入るや實にナポレオン新生涯の始とす此校に入る者貴族若くば富家の子たり故に奢侈自ら競ひコルシカ島狀師の子貧困の狀を見指笑嘲弄之れと齡

朋輩と彌疎く書冊と倍親しむ

ナポレオンの雪戰

する事を恥づナポレオン由て世人の氏姓と富貴とを以て上と爲すの迷妄を悟りまた天性の才德貴賤の別なき事を稔知せりナポレオン其始て校に入るや佛語を解せざりしかば同儕益之を賤しみ外國人を以て之を待つ故に朋輩と彌疎く而して書冊と倍親しく勉强學習の性茲に益固定せり其教課は高等にして思想に屬するの學術及び羅甸語の如き異邦の語學も亦之れあり其最も重んずる所のものは史學算學たり元と此二課は其所長ある上に非常の勉强に由り忽ち上席に坐し遂に教師朋友の屬目する所と爲れり

ナポレオン、ブリンヲの校に在るや一年の冬寒氣殊に甚しく大雪連旬外出すべからず殆と幽鬱に堪へず時にナポレオン發議して曰く此の大雪是れ遊戲を爲すの好機期なり咄諸君と力を奮ひ砲臺を築き城塞を造り以て合戰の狀を爲さん豈一大奇與ならずや生徒喜躍して之れに從ふナポレオン已に築城の術に熟し自ら之を規度畫策し一百余人を督課し砲臺城塞其他防戰の具皆雪もて之れを作り各其法に合へり此事を傳聞し遠近より來り觀る者堵を爲せりナポレ

十五歲にしてパリスの兵學校に入る

鳳輿夜寐圖書を左右にす

算術の難問題に七十二時間思ひを凝らす

チン生徒を分て二軍と爲し一は城を攻め一は城を守る自ら兼て兩軍に將とし攻守二軍を督す兩つながら其の宜しきを得勝敗決せず引て數旬に亘り其の命に背く者あれば軍法を以て之れに擬せしと異日百戰縱橫宇內を席卷するの氣勢茲に其兆を顯せり

十二の縣立學校より每年優等生三人を選び之をパリスに貢するの制規ありしナポレチン此校に學ぶ已に五年試檢を經其選に入る時に年十五兵部卿の薦書に云く「モンシコール、デ、ポナパーテナポレチン」一千七百六十九年八月十五日生る身材五尺六寸有半第四學期を卒業す身體强壯性質柔順にして正直重厚行狀人の模範と爲るに足れり力を算術に用ひ僧侶に度越す史學地學中等たり他日當さに優等のセイロル（航海士）たるべし宜しく許してパリスの學校に入らしむべし」と抑此校本と貴族の子弟を敎育するために設け生徒三百ありしが便利快安各一僕を從へ事に供せしめ驕惰風を爲しナポレチンと固より相容れずナポレチン夙興夜寐圖書を左右にし且つ思ひを算術に凝らし時に至難の問題出でし事ありしかば七十二時間之れがた

學生交際の得失

紙牌の戲れ舞踏の遊びは之を爲さず

事を議する鑿々嶽に中たる

プラタルクの英雄傳ホメルの詩史之を愛讀す

めに思ひを費し始て其解を得たり此の如き事數〻ありしと學生の交際に汲々たる固より好むべき事にはあらざれどしかれども交際を絕つも亦不可なりナポレチンの此校に在るや交りをパリス上等社會に納れ光陰の少分を以て之れに充て碩學鴻儒の席に列し相與に天下有用の事を談ず頗る之を以て興と爲し又其益を得る大なりしと彼の紙牌の戲れ舞踏の遊びの如きは則ち趣味なしとして之れを爲さず唯〻已れが意氣と相投ずる社會と交はるのみ此の時尙ほ成童に及ばずまかれども之れに接する者其眼光の烱々たると言動活潑にして爲る事あるの氣象に服せざるなく且つナポレチン何等の事を議するも決して浮泛ならず鑿鑿皆竅に中り聽く者未た嘗て其心思の卓越と學識の浩博なるに驚かざるはなかりし

ナポレチンの史學に耽るや兒時嗜好の第一たり就中プラタルクの英雄傳最も其好む所にして書中古英雄智勇の精神英武の事功の如き欽慕止まず恰も身當時に在り之れと肱を交へ膝を接するが如くありしまた古詩を愛誦し希臘の詩人ホメルの詩史の如きは嘗て身

劍を腰にしホメルを按ばさみ道を世界に闢く

を離さゞりしと其の母に寄する書に云く兒將さに劍を腰にしホメルを按ばさみ道を世界に闢かんと一日老將ポリー叫んで曰く嗚呼ナポレオン足下は近世の人にあらずプラタルク英雄傳中の人なりとナポレオン最も算學を好み且つ之れに屬する機械學量地學及び砲術の如き皆善く煉達せり故に後ち其戰地に在るや此等の事屬官の力を假らず自ら之を爲し其の運用の妙を極めしといふ

後ち其重大の任に當り能く許多の劇務に耐へ許多の困苦を忍ぶや人視て以て鬼神と爲せしも其平素養ふ所に由らずんばあらずナポレオン何等の事といへども其才を盡くし全力を用ひざる事なし故に凡て艱難なる者をして容易ならしむ

艱難なる者なして容易ならしむ

其職務に從ひ之れに應ト能く其責任に副ひ其功績を奏するに至れり其元帥たるや人々意へらく獨り軍事に長けたりと何ぞ料らん萬事に通曉し又自ら爲すの精神あり教育の事政治の事錢穀の事其晴熟煉通する猶ほ三軍の將畧に於るが如くありし所謂三軍の將畧を以て全歐を震動せし絶世の英傑自ら言へる事あり曰く吾れの心志

万事に通曉し又自ら爲すの精神あり

絶世の功業膝下の教養に因す

吾れの勉力吾れの自ら治ること大抵家に在りし時母の教養に因て得たりと

フランクリン八歳にして學に就く

ベンヂャミン、フランクリン幼傳

(185)

ベンヂャミン、フランクリン一千七百零七年を以て合衆國ボストンに生る父をヂョサヤスといふ染絲を以て業と爲す子女十有七を擧ぐ氏は其第十五たり父氏をして行教法師たらしめんと欲す八歳學に就く家固より貧して學費を給する能はず已む事を得ず退學せしめ其後ち更に某の速成校に入れ讀書習字を課す十歳にして業を終へ家に歸り家業を助け居る事二年兄某家を辭して船師と爲る父氏も亦た其海員と爲らん事を恐れ氏をして鍛冶を學ばしむ而して其事豫想の如くならず時に兄ヂェームス英國より還り印刷の業をボストンに營む父氏に命ト て就て之れに事へしむ其のボストンに在るや諸所の書店に往來し種々の書籍を得獨修置かず數夜を徹するに至る一富商あり大に氏の勤學に感ト其の癖する所の書を貸し隨意に之を覽せ

印刷の業に從事す

獨修置かず數夜を徹す

しむ氏是れに由て博覽多識詩を作り文を屬する大に得る所あり嘗て兄ヂェームスの需めに應ト踏歌の二曲を作り之を刊行し躬自ら行て之を販賣す氏の信友にコルリンといふ者あり亦書を好む氏に讓らず一日二人會話せしに語次偶爭論を致し終に決せず因て相約す爾後其論せんと欲する者は之を紙筆に訴へんと是れより筆戰縱横攻擊止む事なし然るに其書悉く父の手中に落つ父二人の筆勢論理を閲せしにコルリンの文優美整頓氏の及ぶ所にあらず爾後氏倍奮激し專ら力を作文に用ふ氏嘗て一書を閲せしに肉食の非を論ト菜食の功を述ぶ因て大に悟る所あり直ちに肉食を禁ト日々蔬菜を食す朋友皆其奇を笑へども氏自若として顧みずために大に食費を減ト以て書籍購求の用に充つる事を得其他益する所少からず自ら誇て曰く余印刷所に在り余が兄及び衆工余を工場に捨て各就て家に食し余獨り工場に在り一片の麵麭一塊の菓一杯の水を以て食と終へ衆人往返の間を以て之を學問の事に用ひ而して余考察の明理會の速かなる即ち是れ飲食を節制するの致す所なりと氏自ら制する所

奮激して力を作文に用ふ
肉食を禁じ菜食を爲す

飲食を節制して腦力を敏にす

の修身十二則の緒言の略に云く常に飲食を節せるより腦力の鋭敏あるは學術と智識とに著しき進歩を加へたり是れ飲食の節制を以て項目の首條に置きたる所以なりと此れと相發明すべし爰に其十二則を掲ぐ

左の十二則は氏少年の時其身を修るために設けたるものなり

一節制　氣の重くなるまで物を食はず極度まで酒を飲まず
二寡默　自他を益するにあらずんば言はず瑣末の談話を爲さず
三秩序　物其處を守らしめ業其時を守らしむ
四決斷　爲すべき事を爲さんと決斷し決斷したる事は必ず行ふ
五儉素　自他を益するの外浪りに費さず
六勉强　光陰を失はず常に有用の業に從事して無用の行ひを捨つ
七眞實　欺罔を行はず思ふ事は必ず直言ふ事は必ず實

義勇の性を具ふ

文名を天下に揚げんと欲す

八公正　不義の行を爲し或は已れの要務を欠て人を害せず
九中和　偏僻を遠け怨みを忍ぶ
十清潔　身體衣服住居に不潔を留めず
十一平穩　瑣末の事或は尋常一般の事故のために動かされず
十二寛仁　已れの安和を妨けず人の名譽を害せず

氏事の大小難易に論なく自ら以て義と爲すものは則ち速かに實行するの勇氣あり嘗て或る人其の算術の拙きを譏る氏嘗然數學の書を購求し黽勉以て之れを習ひ幾何もなく幾何測量等に通ずるに至れり氏兄に從ふ事既に三年ヂェームス始て某の新聞を發兌す氏嘗て一篇の文を作り匿名にて之を投せしに社員投書を點檢し氏の文を手にして其妙搆を感ヤ誰人の作たらんかと頻りに賞讃せり氏側に在り心竊に之を悅び謂へらく我れ必ず文章を以て名を天下に揚げんと爾後數投ず遂に氏の作たる事を知る是を以て兄及び朋友漸く氏を敬するに至る一日氏兄の意を失し兄大に怒り諸印刷所に囑し氏を雇ふ事勿らしむ氏進退大に窮し書籍を賣却し若干の旅費を

十七歳の時他郷に流離す

得密かに船に搭して（のり込む）ニューヨルクに至る氏時に年十七鄕を離るゝ百余里一人の知己朋友なく且つ一業の營むべく一家の身を寄すべきなく孤慈無聊（たのしみなく）實に憐むべきの境遇あり遂にフヰラデルフヰヤに至る其の間の艱難困苦の狀氏の自記あり曰く余初め此處に着せしや身弊衣をまとひポケット襦袢及び足袋を携へ前夜船中眠らず且つ饑を忍ぶを以て已に行步に艱み旅舍の所在を知らず漸くマーケット街に達し麵麭を賣る一小童に逢ひ余三錢を投し粗大の麵麭三塊を得且つ食らひ且つ行き已に滿腹し尙ほ二塊を餘せしかば之を路傍の婦人と小兒に與へしと

編者曰く氏困苦に切迫し身且つ救ふに暇あらず然り而して尙ほ人を救ふに汲々餘餐を路傍の究人に與るが如き大人豪傑の氣象他日亞米利加を壓制の庭に救ひ獨立ならしむるの大仁大度已に玆に顯はる○此れ氏十七歳に至るまでの概畧あり爾來幾多の艱難に遭遇し奮勵激昂遂に彼の電氣の大發明の如きに至る事少壯後に屬し且つ斯くの如きの偉人他日其全傳を讀まざるべからざ

るを以て玆に之れを載せず

先賢幼時言行錄終

明治廿五年一月廿五日印刷
明治廿五年一月廿六日出版

正價金拾五錢

編輯者　犬塚敏三郎
神田區駿河臺袋町壹番地

發行兼印刷者　大橋新太郎
日本橋區本石町三丁目十六番地

發兌元　博文館
東京日本橋區本石町三丁目

版權所有
先賢幼時言行錄

東京京橋區元數寄屋町四町目二番地杉原活版所印刷

博文館發兌書目

佛國學士會院長シュヤ氏著　文學士小川忠武君譯述
●佛蘭西二人皇后　全二冊　正價金二拾四錢　郵便稅八
謡地源一郎先生著　武内桂舟密畫
●尊王美談　平野次郎　正價金拾　郵便稅四

秋原捨五郎君著
●少年書類　家庭讀本　正價金拾五錢　郵便稅四
鴎外森林太郎君序文　巖谷漣山人著　武内桂舟密畫
●こがねの丸　正價金拾二錢　郵便稅四

尾崎紅葉山人著　武内桂舟密畫
●二人むく助　正價金拾二錢　郵便稅四

江見水蔭居士著　武内桂舟密畫
●今辨慶　正價金拾二錢　郵便稅四

北村紫山著
●維新三傑　正價金拾二錢　郵便稅四

山田美妙齋著　富岡永洗密畫
●雨の日ぐらし　正價金拾二錢　郵便稅四

川上眉山人著　武内桂舟密畫
●寶の山　正價金拾二錢　郵便稅四

幸田露伴著　小林永興密畫
●二宮尊德翁　正價金拾二錢　郵便稅四

經岸のやおむろ著　富岡永洗密畫
●姉と弟　正價金拾二錢　郵便稅四

巖谷漣山人著　武内桂舟、水野年方密畫
●當世少年氣質　正價金拾二錢　郵便稅四

宮崎三昧著　小林永興密畫
●親の恩　正價金拾二錢　郵便稅四

幸福散史澁江保君著
小學讀話材料
●西洋妖怪奇談　正價金拾二錢　郵便稅四

英國大博士スマイルス原著　日本文學士荻原朝之介君譯
●俊傑少年　正價金拾二錢　郵便稅四

英國大博士スマイルス原著　日本文學士荻原朝之介君譯
●俊傑老・年　正價金拾二錢　郵便稅四

巖谷漣山人著
●舌切蛤　正價金八錢　郵便稅二

巖谷漣山人著
●かち〳〵山狸紀念碑　正價金八錢　郵便稅二

巖谷漣山人著　武内桂舟密畫
●猿蟹後日譚　正價金八錢　郵便稅二

尾崎紅葉山人著　富岡永洗一畫
●鬼太郎　正價金八錢　郵便稅二

谷日政德君著　密畫數十個入
●少年修身の寶　全三冊　正價一冊金拾錢　郵便稅一冊四錢

現代小說　竹内鳴雪君著　眞地密畫數十個入
●生徒の寶　第一編　正價金拾二錢　郵便稅四

眞地　坂下龜太郎君著　密畫數十個入
●物理奇觀　第二編　正價金拾二錢　郵便稅四

眞地　坂下龜太郎君著　密畫數十個入
●物理奇觀　第三編　正價金拾二錢　郵便稅四

眞地　坂下龜太郎君著　西洋木版數十個入
●物理奇觀　正價金拾二錢　郵便稅四

坂下龜太郎君著　正價金四拾錢　郵便稅八
●簡易物理學

正七位内藤耻叟先生著　松本奎圖畫
●大祭祝日義解　正價金拾錢　郵便稅四

山田美妙齋著　貴族學校二氏密畫
●青年唱歌集　全二冊　正價一冊金拾錢　郵便稅一冊二錢

正七位内藤耻叟先生校閲　奥山平次郎君著
●教育勅語釋義　賣價金拾錢　郵便稅四

基本
第一高等中學校教授小中村義象先生
第一高等中學校教授落合直文先生考案　武内桂舟密畫
●日本歷史雙六　正價金廿五錢　郵便稅四
附錄　歷史圖解一冊

從三位子爵福羽美靜先生著
●忠孝本義　正價金五錢　郵便稅二

森鴎外　德富蘇峯　森田思軒　幸田露伴四先生序文
梅花道人中村幹男君著
●新體梅花詩集　賣價金拾錢　郵便稅四

宮中顧問官芳川顯正公題辭
文學博士井上哲二郎君序文　鈴木倉之助君著
●勅語衍義　國民修身談　賣價金二拾五錢　郵便稅六

文學博士島田重禮君序文　澁江保君編述
●國民錦囊　賣價金一　郵便稅拾二錢

學習院教授峯是三郎君校閲　素木貞觀君著
●初等教育　修身口授書　正價金拾二錢　郵便稅二

幸福散史澁江保君著
●少年立志書類　神童

鈴木倉之助、中村鳳三郎君編
●少年立志書類　泰西近古史談　正價金拾二錢　郵便稅一錢五厘

板垣退助公　勝安芳公　中江篤助君題辭
栗原柔一君　德富猪一郎君　小林樟雄君
世界旅行者依光方成君著述
●三國五洲世界周遊實記　植木侯爵君　島田三郎君　辻治之君序文
賣價金二拾五錢　郵便稅四

總生寬先生著
●武經　正價金拾二錢　郵便稅二

英國マッシュース氏原著　澁江保君譯補
●處世活法　賣價金二拾五錢　郵便稅二錢五厘

澁江保君譯述
●處世方針　幸福要訣　賣價金二拾五錢　郵便稅二錢五厘

法學士高槻純之助君序文　澁江保君著
●福之神　賣價金二拾五錢　郵便稅二錢五厘

鳩密顧問官伯爵寺島宗則公題辭
東京商業會議所頭取澁澤榮一君序文　中原尙德君編
●世界第一之金傑ロスチャイルド一家詳傳　正價金拾二錢　郵便稅二

日本商業雜誌主筆　坪谷善四郎君著
●內外豪商列傳　正價金拾二錢　郵便稅四

村山勤君著
●マルナンルーテル　正價金二拾錢　郵便稅四

松井廣吉君編
●日本百傑傳　全六冊　正價一冊金拾二錢　郵便稅一冊四錢

第一高等中學校教授久米幹文先生校閱
千葉縣臺奥沙究分所講師帆足正久君著

假字つかひ早學　正價金拾五錢　郵便稅二錢

第一高等中學校教授久米幹文先生校閱小谷一馬君著

國語教授問答　正價金拾五錢　郵便稅二錢

石川千代藏先生著

文法詳解　正價金二拾錢　郵便稅六錢

石川千代藏先生著

小學日本文範　正價金拾五錢　郵便稅四錢

陸軍士官學校教授三木貞一君校閱
少年青年

文園遊戲　寄藤長蔭君編　賣價金二拾五錢　郵便稅二錢五厘

陸軍士官學校教授高橋純之助君序文　須永金三郎君著

日本學生用文　正價金四拾錢　郵便稅六錢

陸軍教授小谷口政德君著
現在

生徒用文　正價金拾錢　郵便稅七

陸軍中將三好重臣公
陸軍大學教授內藤延愛君編輯
幻堂內山正如君題墓。

日本軍人用文　正價金三拾錢　郵便稅八錢

賣藥院員長長谷川先生所贈　內山正如君著
實地活用

日本用文大全　賣價金二拾五錢　郵便稅六錢

陸軍侍稅所教子君序文　佐々木信綱君著

日本婦女用文　賣價金二拾五錢　郵便稅二錢五厘

田口卯吉先生序文　須永金三郎君著
新撰

日本商業用文　賣價金二拾五錢　郵便稅六錢

第一高等中學校教授落合直文先生
第一高等中學校教授小中村義象先生　合著

家庭教育

歷史讀本

毎月一回發兌毎卷讀切密畫數個入和裝美本

正價　一冊拾二錢六冊前金六拾七錢十二冊前金壹圓廿五錢郵稅一冊四錢宛

第一編　能褒野の露……日本武尊之事蹟
第二編　祕野の嵐……曾我兄弟復讐事蹟
第三編　如意輪堂……滿正行之事蹟
第四編　泉岳寺……赤穗義士復仇事蹟
第五編　小松の雪……平重盛之事蹟
第六編　鬼界ケ島……後寬倉都之事蹟
第七編　鶴岡……靜御前之事蹟
第八編　鳥塚……袈裟御前之事蹟
第九編　館の烟……細川忠興夫人事蹟
第十編　青葉の笛……平敦盛之事蹟
第十一編　日の若草……阿新丸之事蹟
第十二編　森野の……森蘭丸之事蹟
第十三編　宇佐の……和氣清麿之事蹟
第十四編　恩賜の御使……菅原道眞之事蹟
第十五編　御船の衣……神后皇后之御傳
第十六編　土の浪……護良親王之御落
第十七編　むろや……

54

4
206

4
206
Ⓜ

004653−000−2

4−206

先賢幼時言行録

犬塚　敏三郎／著

M25

ACE−1307

12